

那 珂 68

—那珂遺跡群第136・137・138・140次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1230集

2014

福岡市教育委員会

那珂 68

—那珂遺跡群第136・137・138・140次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1230集



遺跡略号	調査番号
NAK-136	1210
NAK-137	1211
NAK-138	1212
NAK-140	1224

2014

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・韓（朝鮮）半島と一衣帶水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。なかでも旧那珂郡には、旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、那珂遺跡群第136・137・138・140次発掘調査について報告するものです。これらの調査では弥生時代の祭祀土坑を伴う甕棺墓群が検出されたほか、飛鳥時代の稀少な瓦がまとまって出土するなど多くの発見がありました。これらは地域の歴史の解明、那珂遺跡群の日本史上における位置づけのための重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、地権者様・事業主様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまで深いご理解と多くのご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例　言

1. 本書は、福岡市が福岡市博多区那珂1丁目地内において実施した発掘調査である那珂遺跡群第136・137・138次発掘調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図は、136・137次は阿部泰之が、138・140次は荒牧宏行が作成した。
3. 本書に掲載した遺物実測図は、136・137次は平川敬治・阿部が、138・140次は荒牧が作成した。
4. 本書に掲載した挿図の製図は、136・137次は阿部が、138・140次は荒牧がおこなった。
5. 本書に掲載した写真は、136・137次は阿部・平川が、138・140次は荒牧が撮影した。
6. 本書で用いた方位は磁北で、真北から $6^{\circ} 30'$ 西偏する。
7. 遺構の呼称は井戸をSE、土壙をSK、甕棺墓をSTと略称する。遺構番号は発掘調査の際、現場で任意に振った通し番号を特に断りなき限りそのまま用いる。
8. 本書にかかわる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収藏する予定である。
9. 本書の執筆は、136・137次は阿部が、138・140次は荒牧がおこなった。編集は阿部がおこなった。
10. 本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成25年3月現在の推定線であり、現在は変更されている可能性がある。詳細は福岡市文化財部埋蔵文化財審査課に確認されたい。
11. 本書で報告する発掘調査の細目は以下の通りである。

那珂遺跡群第136次

遺跡調査番号	1 2 1 0	遺跡略号	N A K - 1 3 6	
所在地	福岡市博多区那珂一丁目688番1		分布地図番号	037 東光寺
開発面積	543.87m ²		調査面積	92.2m ²
調査期間	平成24年7月6日～平成24年7月28日		事前審査番号	23-2-1120 他3件

那珂遺跡群第137次

遺跡調査番号	1 2 1 1	遺跡略号	N A K - 1 3 7	
所在地	福岡市博多区那珂一丁目688番1		分布地図番号	037 東光寺
開発面積	543.87m ²		調査面積	14.2m ²
調査期間	平成24年7月29日～平成24年7月31日		事前審査番号	23-2-1120 他3件

那珂遺跡群第138次

遺跡調査番号	1 2 1 2	遺跡略号	N A K - 1 3 8	
所在地	福岡市博多区竹下五丁目18番・37番		分布地図番号	037 東光寺
開発面積	364.65m ²		調査面積	19m ²
調査期間	平成24年7月17日～平成24年8月1日		事前審査番号	24-2-162

那珂遺跡群第140次

遺跡調査番号	1 2 2 4	遺跡略号	N A K - 1 4 0	
所在地	福岡市博多区竹下五丁目16番1		分布地図番号	037 東光寺
開発面積	524.24m ²		調査面積	34.4m ²
調査期間	平成24年11月19日～平成24年12月9日		事前審査番号	24-2-492

本文目次

那珂遺跡群の位置と環境	1
那珂遺跡群第136次調査の記録	3
那珂遺跡群第137次調査の記録	30
那珂遺跡群第138次調査の記録	36
那珂遺跡群第140次調査の記録	50

挿図目次

Fig.0 本書報告の調査地周辺における既往の調査地点位置図 (1/4,000)	2
--	---

(136次調査)

Fig.1 136次調査区位置図 (1/500)	3
Fig.2 136次調査区全体図 (1/100)	4
Fig.3 136次調査区東壁土層断面実測図 (1/60)	5
Fig.4 SK02実測図 (1/40)	6
Fig.5 SK02出土遺物実測図 (1/3・1/6)	7
Fig.6 SK03・SK09実測図 (1/40)	8
Fig.7 SK09出土瓦・須恵器大甕実測図 (1/4・1/6)	9
Fig.8 SK20実測図 (1/40)	10
Fig.9 SK20出土遺物実測図 (1/3・1/6)	11
Fig.10 ST05・06・08・10・11実測図 (1/30)	12
Fig.11 ST05・08・11甕棺実測図 (1/12)	13
Fig.12 ST06・10出土土器実測図 (1/6)	14
Fig.13 ST16・17・18実測図 (1/30)	15
Fig.14 ST16・17甕棺実測図 (1/12)	16
Fig.15 ST19実測図 (1/30)	17
Fig.16 ST18・19甕棺実測図 (1/12)	18
Fig.17 遺構検出面出土および表面採集遺物実測図 (1/4)	19

(137次調査)

Fig.1 137次調査区位置図 (1/500)	31
Fig.2 137次調査区全体図 (1/100)	32

Fig.3	SK45・ST01実測図（1/30）	33
Fig.4	SK45・ST01出土遺物実測図（1/1・1/12）	34

(138次調査)

Fig.1	調査区位置図（1/600）	37
Fig.2	遺構配置図（1/100）	37
Fig.3	遺構実測図（1/40・1/50）	38
Fig.4	SD01出土遺物実測図（1/3）	39
Fig.5	SX03・SE04出土遺物実測図（1/3）	39
Fig.6	瓦実測図1（丸瓦 1/3）	41
Fig.7	瓦実測図2（平瓦 1/3）	42
Fig.8	瓦実測図3（平瓦 1/3）	43
Fig.9	瓦実測図4（平瓦 1/3）	44
Fig.10	瓦実測図5（平瓦 1/3）	45
Fig.11	瓦実測図6（平瓦 1/3）	46
Fig.12	瓦実測図7（軒丸瓦 鳥尾 1/3）	47
Fig.13	出土瓦観察表	48
Fig.14	第138次調査地点と中世後半期の溝	49

(140次調査)

Fig.1	調査区位置図（1/400）	51
Fig.2	遺構配置図（1/200）	51
Fig.3	SD01実測図（1/40）	52
Fig.4	第140次調査地点と中世後半期の溝	54
Fig.5	旧地形図	54

那珂遺跡群の位置と環境

現在の福岡市の中心的位置を占める福岡平野は、背振山系から発した那珂川と牛頭・四王寺山地から発した御笠川によって形成された冲積平野である。現在は市街地化が進み旧状はほとんど窺えないが、もとは広大な農村地帯であった。この平野はその中央部に春日方面から延びる低丘陵「須玖丘陵」が位置し、那珂川と御笠川の流域はこれによって画されている。この丘陵は長期間にわたる侵食作用によって開拓された谷に隔てられ、複数の独立丘陵に分かれている。いずれの丘陵にあってもそこには多くの遺跡が存在し、那珂遺跡群はそのなかでも大規模かつ長期にわたり利用された遺跡である。今回報告する第136・137・138・140次調査地は遺跡の中央部、遺跡が乗る丘陵の最高所に近い位置にある。

那珂遺跡群は、旧石器時代から近世にかけての遺構・遺物が検出されている複合遺跡である。以下、今回報告する発掘調査において検出・出土した遺構・遺物にまつわる那珂遺跡群の状況について概観したい。

136・137次調査では祭祀土壇を伴う甕棺墓群が検出されたが、那珂遺跡群において甕棺墓群が検出されるのは遺跡が乗る丘陵の東縁辺部と尾根筋の最高所、現在のアサヒビール醸造工場内を中心とする地域で、今次調査地点は後者のエリアに含まれる。尾根筋に位置するものは全域で東西約500m・南北約300mにおよぶ範囲で、大きく2つのグループに分かれる。1つは1箇所に集中して甕棺墓・土壇墓が構築されるもので、アサヒビール敷地内の北西に位置する。第50次調査でその大部分が調査されており、墳丘墓の可能性が指摘されている。もう1つは列状に延びる配列を有するグループである。丘陵の尾根上に配置されるもので、位置関係が一貫しないものがあり列埋葬のラインが複数ある可能性が高い。うち1つは今次調査地からアサヒビール工場敷地東部・東光寺剣塚古墳の周辺に至る。丘陵の東縁辺部で甕棺墓が検出されている例もあり、甕棺墓列が向きを変えてさらに延び、ここまで達するのか、別個のグループがあるのか延長部分の調査例が少なくいまのところわからない。甕棺の型式は汲田式から須玖式、立岩式の範疇に収まるもので、中期初頭から後半代の甕棺墓群である。

那珂遺跡群では古代の大規模柱建物跡や溝・井戸・土壇が検出されている。これらの遺構には7世紀初頭まで遡ると推測されるものが含まれ、官衙的施設や寺院の存在が指摘されている。

出土遺物のなかでも注目されるものに瓦が挙げられる。これは溝・井戸・土壇から出土しており、第13次・32次調査では百濟系單弁八葉軒丸瓦、第22次・第23次調査において牛頭窯跡群神ノ前窯系軒丸瓦・平瓦・丸瓦が出土している。第144次調査では23次調査区で検出された溝と連続する溝が検出され、東西約90mを測る区画溝に復元されている。この溝からは平瓦・丸瓦が出土している。これらの調査地は遺跡の中央部から南部にかけて位置する。遺跡の北部では第115次調査が注目される。長軸を東西方向に持つ大型掘立柱建物跡が検出されており、柱抜き取り跡から平瓦・丸瓦が出土、瓦葺建物とされる。115次調査地を含む範囲で長軸を東西方向に持つ正方形の平坦地の存在が推測されており、今回報告する136次調査でローム上に検出された須恵器を含む遺物包含層との関連が注目される。第131次調査ではローム上の遺物包含層と土壇から神ノ前タイプを含む瓦が出土した。

那珂遺跡群では遺跡が乗る丘陵の高所伝いに古代の瓦を出土する調査区がある。特に多量に出土するエリアは認められず、時期の関係もあるが多数の建物が集中していた状況は考えにくい。瓦は6世紀末の初期瓦から8世紀代の定型的なものまで幅広くみられ、包含層に含まれる場合もあることから整地地業を伴いつつある程度継続的に瓦を用いる建物が構築された状況が窺える。

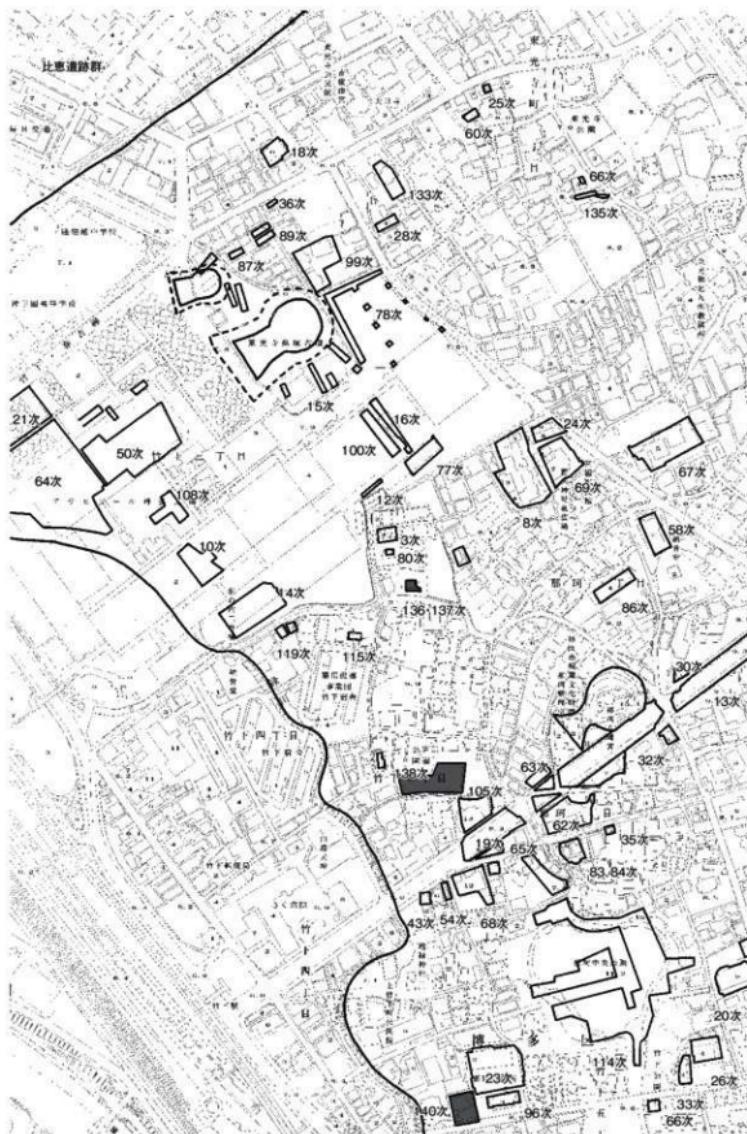


Fig.0 本書報告の調査地周辺における既往の調査地点位置図 (1/4,000)

那珂遺跡群第136次調査の記録

調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区那珂一丁目688番1（敷地面積543.87m²）における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成24年3月から5月にかけて受理した（事前審査番号：23-2-1120・24-2-1・24-2-98・24-2-99）。

これを受けた経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていること、平成24年5月に確認調査を実施し現地表面直下で遺構が確認されたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を重ねた。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できない切り土造成部分について記録保存のための発掘調査を実施すること、個人事業による共同住宅建設でありかつ短期間の調査と見込まれた部分については調査・整理費用に国庫補助金を充当する方向で調整した。

その後、事前審査番号23-2-1120・24-2-1・24-2-99について平成24年7月2日付で3名の個人事業主と事前協議確認書を取り交わし、同年7月6日から発掘調査を、翌平成25年度に資料整理・報告書作成を実施した。

なお、136次調査は短期間の調査であったことなどから、国庫補助金を充当した。

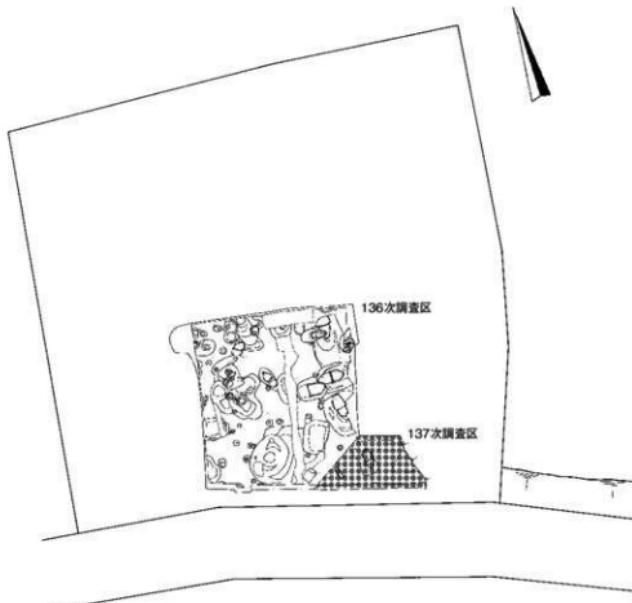


Fig.1 136次調査区位置図 (1/500)

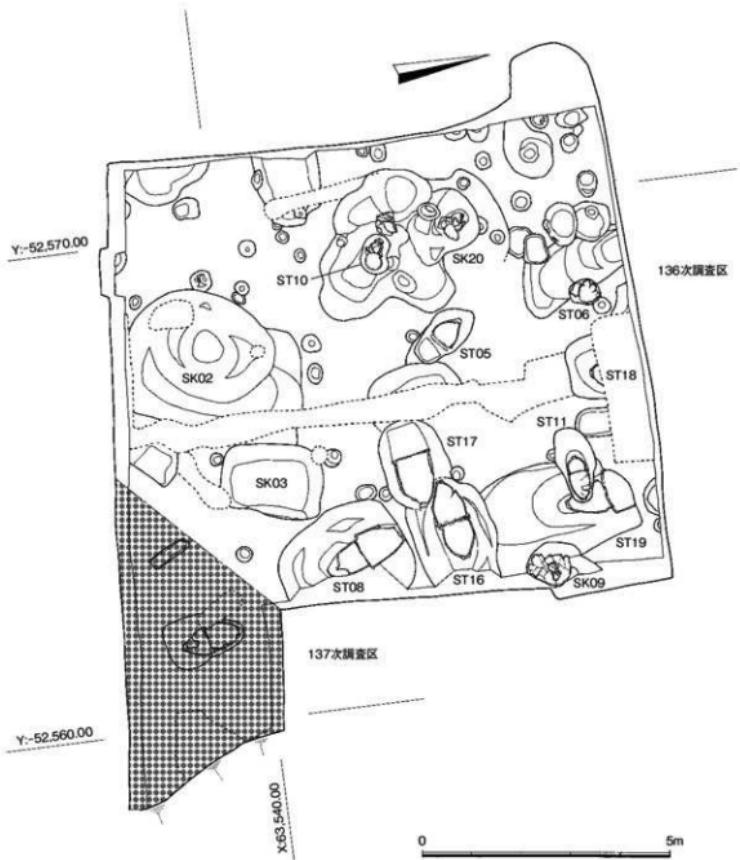


Fig.2 136次調査区全体図 (1/100)

調査の組織

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：文化財部埋蔵文化財調査課長

宮井善朗

調査第1係長

常松幹雄

調査庶務：埋蔵文化財審査課 管理係

川村啓子

事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係長

加藤良彦

事前審査係主任文化財主事

佐藤一郎

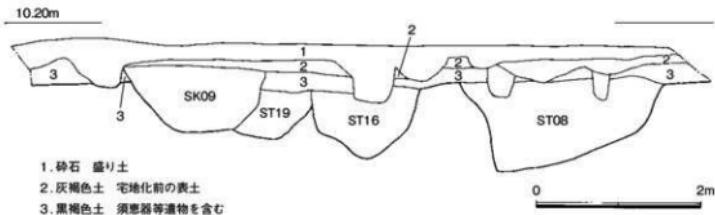


Fig.3 136次調査区東壁土層断面実測図 (1/60)

事前審査係文化財主事

木下博文 (平成23年度)

森本幹彦 (平成24・25年度)

調査担当：埋蔵文化財調査課調査第1係文化財主事

阿部泰之

なお文化財部は、組織改編のため平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

1. 調査概要

今回の調査地は那珂遺跡群が乗る丘陵の最高所付近に位置する。標高約10mを測り、遺構面は現地表面下-50～-60cm、明褐色ローム上である。検出された主な遺構は、甕棺墓9基・土壙3基である。土壙は2基が祭祀土壙、1基は須恵器大甕を据え、初期瓦が出土した。

2. 遺構と遺物

① 土壙 (SK)

SK02 (Fig.4・PL.1-3)

調査区南部にて検出した。SK03と隣り合う土壙である。平面形は不整で、長径3.8m・短径2.8mを測る略楕円形を呈する。深さは最深部で1.05mを測る。断面形をみると複数のテラスがあり、複数の土壙を同じ地点に掘り込んだ結果のように見えるが、上面からは切りあいを識別することはできなかった。埋土は黒褐色土、ロームの粒子を含むものの均一な堆積で、現場では自然堆積と判断した。

出土遺物 (Fig.5)

番号1と4は土師器で、混入の可能性が高い。それ以外はすべて弥生土器である。何れの個体も器壁の摩滅が顕著で調整は不明瞭である。

1・2は鉢である。1は口縁部を1/4残す。2は甕の下部の可能性を残し、焼成後に穿孔された可能性がある。3・4は高杯の脚部である。4は胎土精良、外面に二次的な被熱痕跡がみられる。5は甕である。口縁部から胴部の上部のみ完全に接合でき、下部を意図的に破壊したものか。6・7は甕の底部で、何れも外面に赤色顔料の塗布痕が認められる。7の外底面はいびつに窪む。8は大型の甕の可能性がある底部である。外面に焼成時の剥落痕がある。9～12は甕である。9は頸部の小片で内面に赤色顔料の塗布痕が認められる。10・11は広口甕である。10は1/2個体残存し、底部を欠く。頸部と胴部以下は接合しなかったが、胎土と焼成の状態から同一個体と判断した。11は1/3個体残存し、底部を欠く。器壁の摩滅はとくに顕著である。12は袋状の口縁を有する甕である。底部を欠き、2/3個体残存する。厚手で重量があり、内面上部は鼠が齧ったように小さい剥落痕が観察できる。

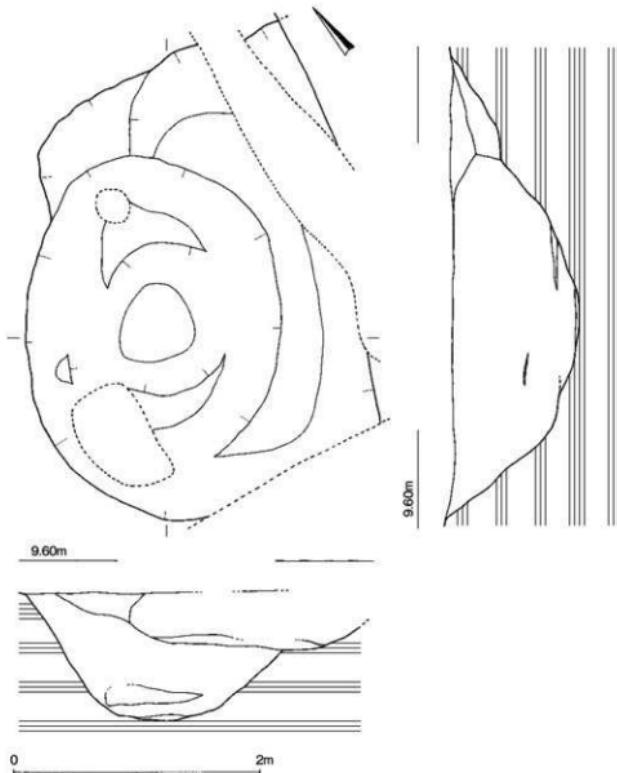


Fig.4 SK02実測図 (1/40)

以下は石器。13は扁平片刃石斧である。蛇紋岩様の石材を用い、基端面と片主面を欠く。14は磨石である。器壁の風化が顕著で擦痕等は不明瞭。砂岩質の礫を用いる。重量125.7gを測る。

SK03 (Fig.6・PL.2-1)

調査区北部にて検出した。SK02と切り合うが、境界部に搅乱があるため先後関係は明らかにしえなかつた。平面形は南北方向に長軸を持つ隅丸長方形で、長径2.1m・短径1.4mを測る。深さは最深部で0.7mを測り、底面は概ねフラットである。埋土は径5cm前後のロームのブロックを含む暗褐色土で、人為的に埋めているものと推測される。東側壁面に掘り込みを検出した。概ね隅丸長方形のプランをもって掘り込み、底面は不整だが北端を明瞭に深くする。この部分の埋土はしまりのない灰褐色土で、下部をロームで埋めている。各層の境界は明瞭で、ここから遺物は出土しなかつた。

遺物は、弥生土器小片が13点・須恵器壺胴部の小片が1点出土した。弥生土器で器種を判別しうる個体ではなく、須恵器は混入と考えられる。遺物が僅少な点はSK02と対照的である。

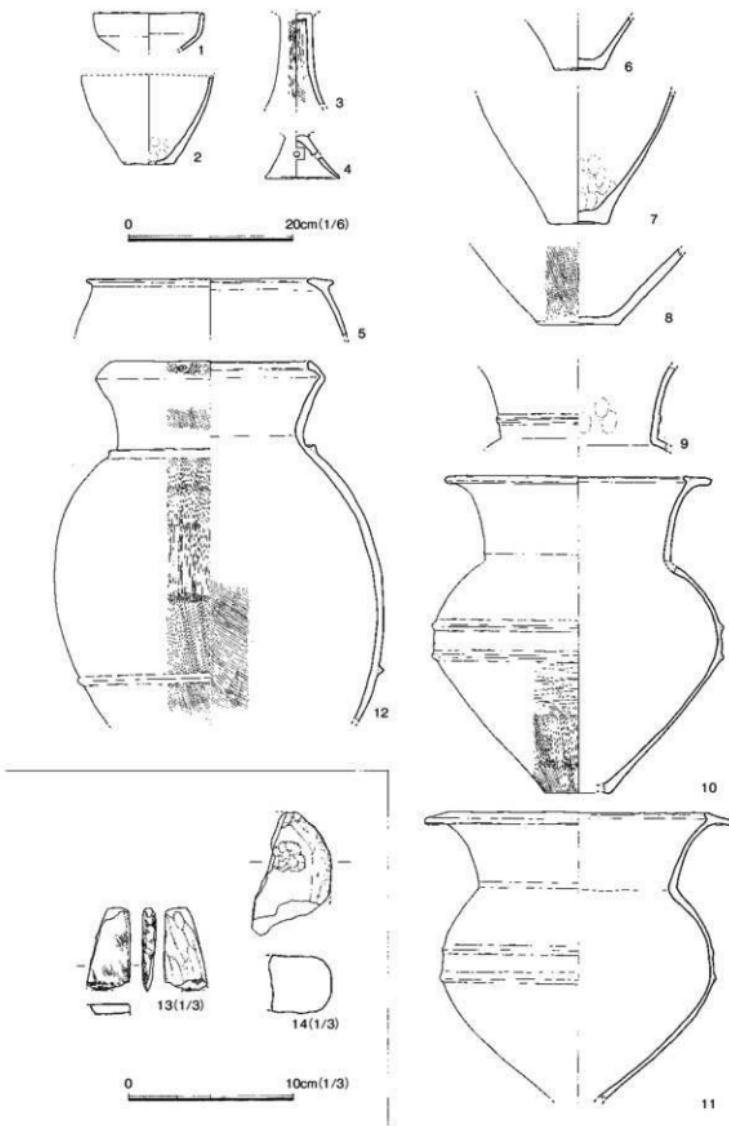


Fig.5 SK02出土遺物実測図 (1/3・1/6)

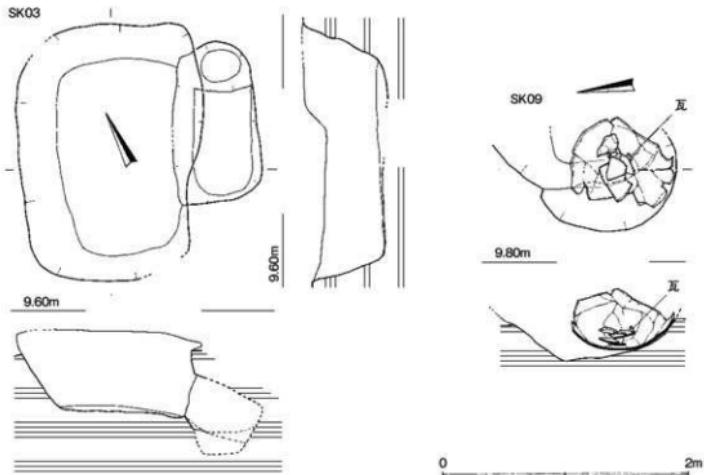


Fig.6 SK03・SK09実測図 (1/40)

SK09 (Fig.6・PL.2-2)

調査区北東端部にて検出した。ST19を切る土壤である。遺構の東半分は調査区外となり平面形は不明である。深さは最深部で0.4mを測り、断面形は大略逆台形を呈する。埋土は径5cm前後のロームのブロックを含む暗褐色土で、人為的に埋めているものと推測される。

この土壤には須恵器大甕が埋置されていた。胴部の曲面から推して口縁を北に向けて横倒しの状態で埋置されたものと推測され、内部には同一個体の破片が落ち込んでいる。破碎されて内部に破片を入れ込んだのか、土圧によって甕が崩壊し内部に落ち込んだのかは判別し得なかった。この破片に混じって角環1・平瓦片1が出土している。

出土遺物 (Fig.7・PL.10)

1は平瓦である。右端面をわずかに残す破片で、器壁の磨滅は顕著だが凹面には模骨痕と、それを切る同心円状の当て具痕が観察される。凸面には平行文のタタキが斜め方向に入る。胎土は精良だが、焼成は不良で土師質を呈する。2は須恵器大甕である。1/4個体残存し、頸部と胴部以下は接合しなかつたが、胎土と焼成の状態から同一個体と判断し図上で復元している。頸部外面には粗なカキメ、胴部外面は細かな格子目タタキ、内面は当て具痕がほぼ消えるまで丁寧にナデを施している。胎土は精良堅致、焼成はきわめて良好で外面全体と頸部内面にうすく均一な自然釉がかかる。

SK20 (Fig.8・PL.2-3・3-1)

調査区北西部にて検出した。平面形は不整で、複数の土壤を同じ地点に掘り込んだ、ないし掘りなおした結果と推測されるが、上面からは切りあいを識別することはできなかった。長径3.4m・短径2.4mを測る。底面は凹凸が顕著で、複数の立ち上がりが検出される。深さは最深部で1.0mを測り、底面からは少量の湧水がみられた。埋土はロームの粒子を含む黒褐色土ではば均一、現場では自然堆積と判断した。土層図に示す第1層はそれ以下の層を切っているように観察でき、掘り直しの痕跡と推測

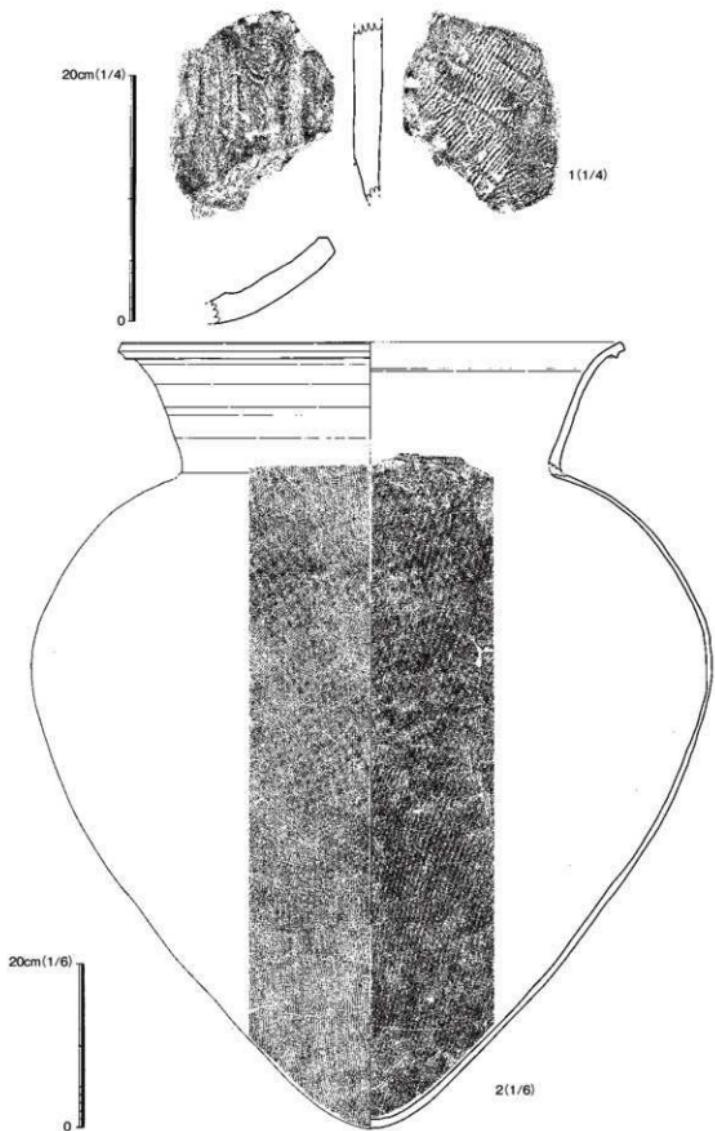


Fig.7 SK09出土瓦・須恵器大甕実測図 (1/4・1/6)

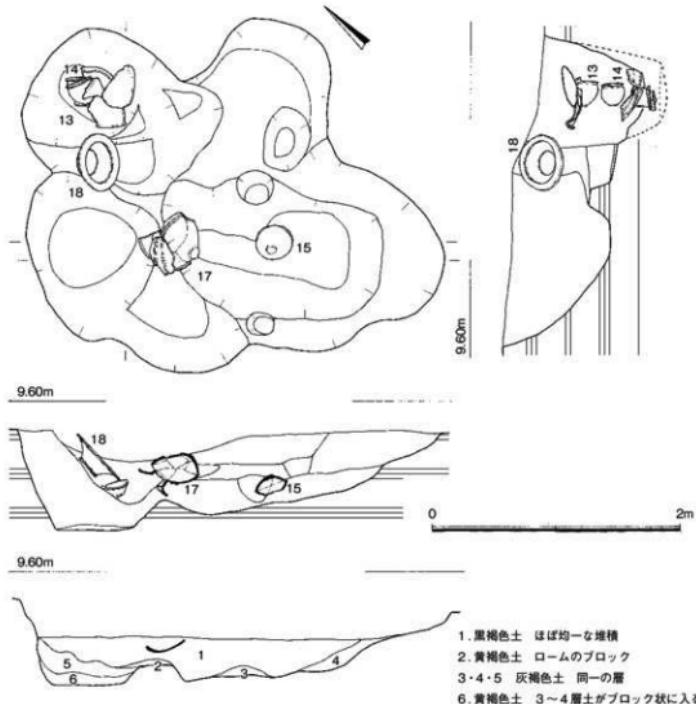


Fig.8 SK20実測図 (1/40)

される。北端部はピット状に深くなり、土器が重層的に出土した。各土器は互いに接せず、ピット状の部分だけは遺物を埋置しつつ人為的に埋めた可能性が高い。

出土遺物 (Fig.9)

土器はすべて弥生土器で、丹塗りの壺が目立つ。土器の器壁は何れも摩滅し調整は不明瞭である。1は安山岩質の石材を用いる石製品である。石剣や石戈の基部か。破断面を除く全体に擦痕が認められ端部はすべて平坦に研磨される。

2～4は壺である。2は薄づくりである。3は外底面は黒斑状に黒色を呈し、密なヘラミガキが施される。胴部には赤色顔料の痕跡が残る。4は外面に赤色顔料の痕跡が残る。5は把手付きの鉢である。6とは胎土・焼成が類似し同一個体か。薄く作り、外面に赤色顔料の痕跡が残る。6は把手の小片である。7～9は壺の小片である。8は無頸壺。何れも胎土は精良で外面に赤色顔料の痕跡が残る。10～15は北端、ピット状の部分からまとまって出土した。上部出土のものから述べる。10は壺の頸部、全周し接合した。胴部との境界で割れており意図して打ち割った可能性がある。11・12は甕である。胎土・焼成が類似し同一個体か。薄く作り軽量である。外面に赤色顔料の痕跡が残る。13・14は無頸壺である。横倒しの状態で上下に重なって出土した。何れの個体もやや厚手で重量があり、外面に赤色顔料の痕跡

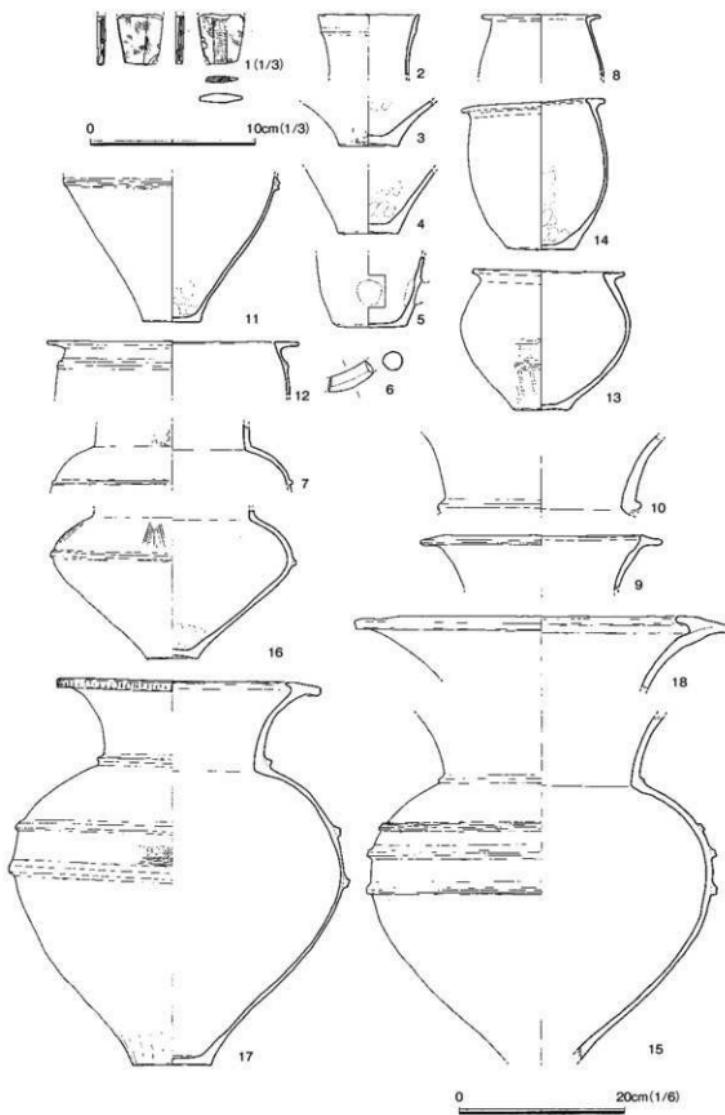


Fig.9 SK20出土遺物実測図 (1/3・1/6)

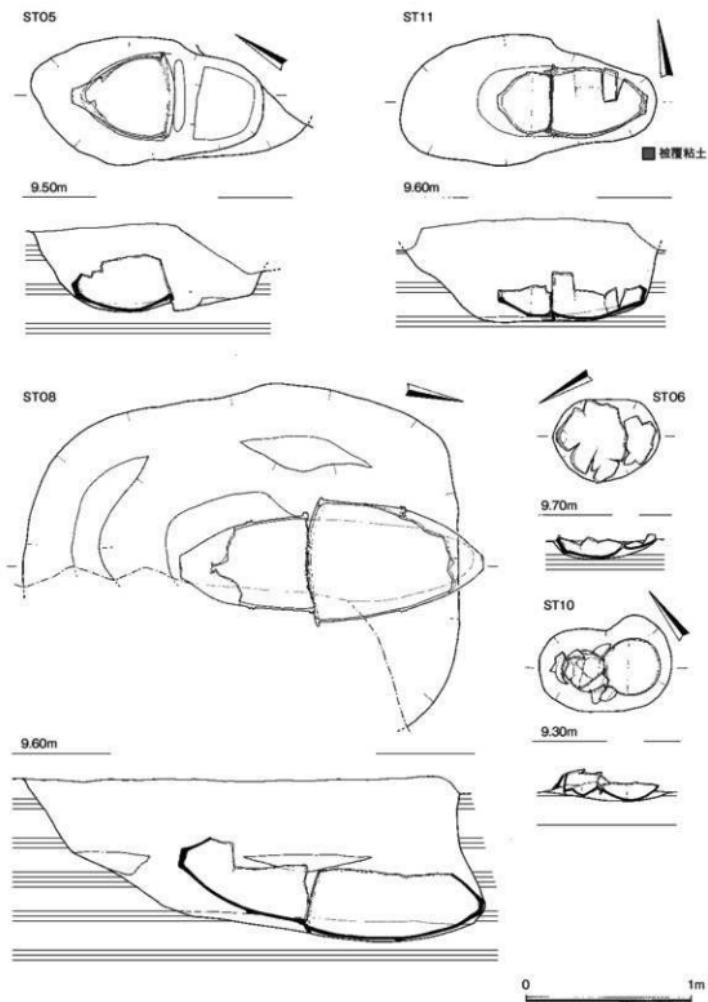


Fig.10 ST05・06・08・10・11実測図 (1/30)

が残る。15は広口壺である。1/3個体残存し口縁と底部を欠く。外面に顔料塗布の痕跡があるが風化のため色調は不明瞭である。

16・17は壺である。16は頸部を除きほぼ完全に接合できた。肩部に魚の尾鰭状の文様を鋭利な工具で施し、現状で3箇所確認できる。内外両面ともに赤色顔料の痕跡が残る。17は広口壺である。ほぼ完形に復元できた。

②甕棺墓 (ST)

ST05 (Fig.10・11・PL.3-2)

調査区中央部にて検出した。単棺である。墓壙は不整梢円形で、埋土は暗灰褐色土である。底部を北に向けて小型の甕を1個体、掘り方の傾斜に合わせて埋置する。甕棺は底面に接地している。掘り方には甕棺口縁部の直下、口縁に沿うように5cm程度の溝が検出され、蓋の痕跡と推測される。

甕棺について (Fig.11・PL.8)

図中番号1。大型の甕を転用し甕棺としている。ほぼ完形に復元できた。器壁は薄く摩滅するが胴部外面には粗なタテハケが全面に観察される。

ST06 (Fig.10・PL.3-3)

調査区北端部で検出した。小型棺である。遺構面ロームの上部に堆積した黒褐色土上で検出したもので、墓壙掘り方は不明瞭である。上部を大きく削られ遺存状態は不良。壺形土器を下棺とし、北方に向いて掘り方の傾斜に合わせて埋置する。上棺は頸部から上を打ち欠いた壺形土器を用い覆口式とし、何れも底面に接地している。

甕棺について (Fig.12)

上棺は図中番号5に示す。壺胴部の小片で径49.7cmに復元される。下棺は番号4。壺だが接合が困難であり底部のみ図示した。器壁は摩滅するが焼成は良好である。

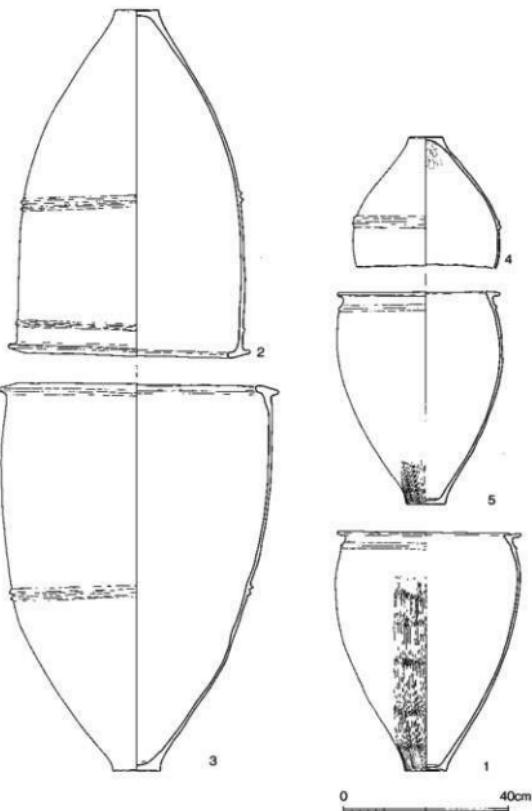


Fig.11 ST05・08・11甕棺実測図 (1/12)

ST08 (Fig.10・PL.4-1)

調査区南東部にて検出した。墓壙は隅丸方形である。北壁下部はオーバーハンプし、墓壙の南東側1/4は調査区外となる。

甕棺は複棺。大型の甕を呑口式に、掘り方の傾斜に合わせ下棺底部を北方向に埋置する。下棺は完形で用い底面に接地しているが、上棺は口縁部下の突堤から上部を打ち欠いて用いる。上棺は墓壙底面から浮く。墓壙南側に馬蹄形のテラスが検出されたが、調査中の埋土観察から、上棺を安定させるためテラス上面のレベルまで一旦埋めたものと推測される。

甕棺について (Fig.11・PL.6)

上棺は図中番号2に示す。口縁部を打ち欠いて使用されているが、埋土内出土の破片を接合したところほぼ完形に復元できた。器壁は摩滅し調整は不明瞭だが、口縁部に黒色顔料の痕跡が認められ、甕棺の外面全体に塗られていた可能性が高い。下棺は番号3。器壁の摩滅は顕著だが器壁の残存部分に黒色顔料の痕跡は認められない。ほぼ完形に復元できた。上棺とも器形は汲田式に似る。

ST10 (Fig.10・PL.4-2)

調査区西部で検出した。SK20を切る。土師器で構成されるもので時期が異なり、甕棺とは呼び得ない遺構だが調査時に甕棺として遺構番号を振ったため、暫定的に甕棺の項で報告する。墓壙は不整な楕円形で、掘り方は不明瞭である。上部を大きく削られ遺存状態は不良。3個体の甕を用い、うち2個体を合口式に組み合わせる。他

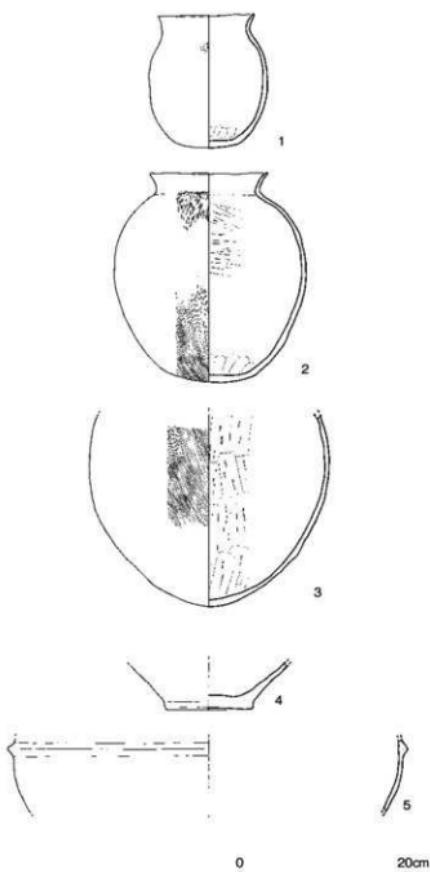


Fig.12 ST06・10出土土器実測図 (1/6)

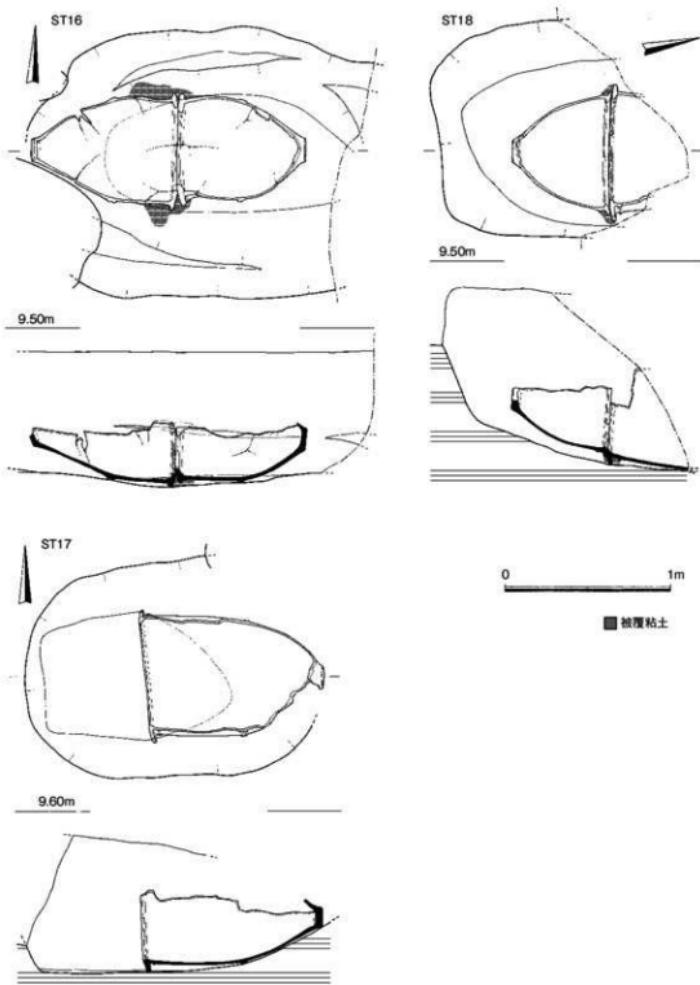


Fig.13 ST16・17・18実測図 (1/30)

の1個体は破碎されたあと2個の壺を覆うように破片が並べ置かれていた。

出土遺物 (Fig.12・PL.7)

何れも土器壺である。1と2はほぼ完形に復元できた。何れも焼成は不良で、器壁の摩滅が顕著である。1は器形はいびつで手捏ね状である。2は外面下部に炭化物が付着し、煮炊きに供された土器を

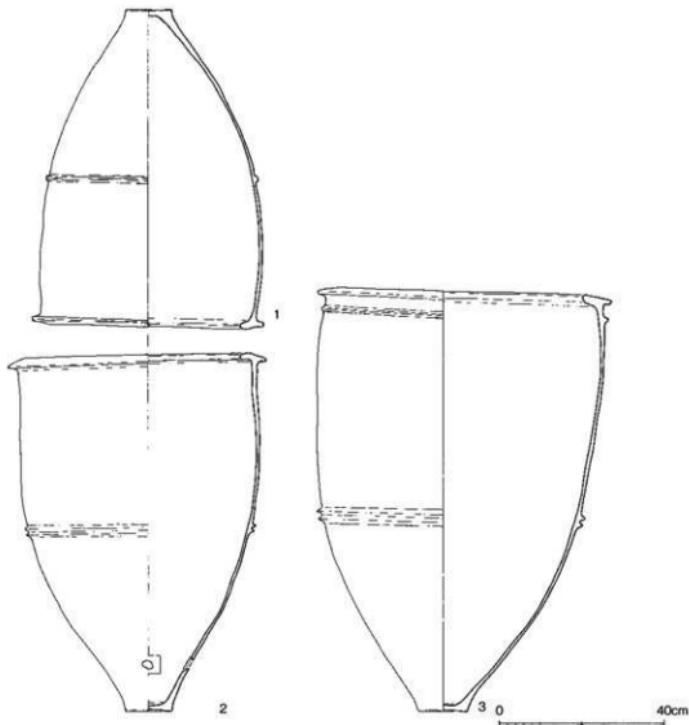


Fig.14 ST16・17斎棺実測図（1/12）

転用したものである。3は胴部下半のみ復元できた。この造構で使用された壺のなかでは大型である。ST11 (Fig.10・PL.4-3)

調査区北縁辺にて検出した小型棺である。ST19を切る。墓壙は不整な楕円形で、下棺のほうを狭くし底面はフラットである。斎棺は複棺で何れも壺を用いる。上棺は上半分を打ち欠いて、下棺は完形で用い、合口式には水平に、下棺底部を東方向に埋置する。上棺は墓壙底面から浮いており、調査中の埋土観察から、上棺を安定させるため底部上面のレベルまで一旦埋めたものと推測される。斎棺の合口部に灰白色の被覆粘土を検出した。粘土は下棺の口縁部上面で止まっている。

斎棺について (Fig.11・PL.7)

上棺は図面番号4に示す。胴部上半を粘土帶接合部から打ち欠いている。外面には大きな黒斑があるがそれ以外に外面下部に黒色を呈する部分があり、黒色顔料が塗布された可能性がある。下棺は番号5。ほぼ完形に復元できた。こちらは口縁部とその下部、内底面に黒色の部分がある。

ST16 (Fig.13・PL.5-1)

調査区東部で検出した。ST17に切られる。墓壙は隅丸方形で、墓壙の東端部は調査区外となる。

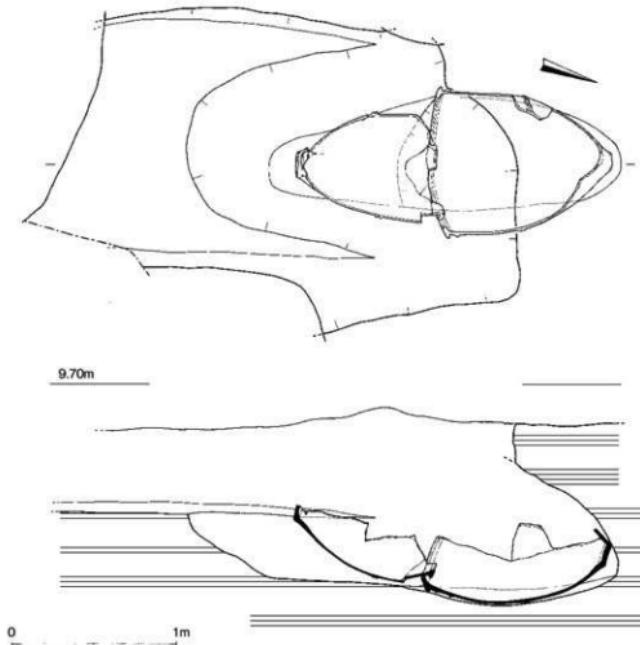


Fig.15 ST19実測図 (1/30)

壺棺は複棺である。大型の壺を合口式に、下棺底部が東方向になるよう埋置する。何れの壺棺も完形で用い底面に接地しているが、下部は掘り方から浮いている。墓壙を一周するように狭いテラスが検出されたが、テラス上面のレベルまで一旦埋め、壺棺を安定させた可能性が高い。壺棺の合口部に白色の被覆粘土を検出した。粘土は壺棺の口縁部を広く覆う。

壺棺について (Fig.14・PL.6)

上棺は図面番号1に示す。ほぼ完形に復元できた。器壁は橙色を呈する。口縁部に黒色を呈する部分があり、外面に黒色顔料が塗布された可能性がある。下棺は番号2。口縁部を一部欠くもの。器壁の色調は明るい褐灰色で胎土は精良である。下棺に黒色顔料塗布痕跡はみられない。

ST17 (Fig.13)

調査区東部で検出した。ST16を切り、墓壙は小判形を呈する。壺棺は大型の単棺で、底部が東方向になるよう埋置する。壺棺は完形で用い、掘り方は壺棺を水平に置けるよう東側底面をゆるく傾斜させている。壺棺の蓋の痕跡は検出できなかった。

壺棺について (Fig.14・PL.8)

図面番号3に示す。ほぼ完形に復元できた。今回出土した壺棺ではもっとも大きい。胴部外面下部

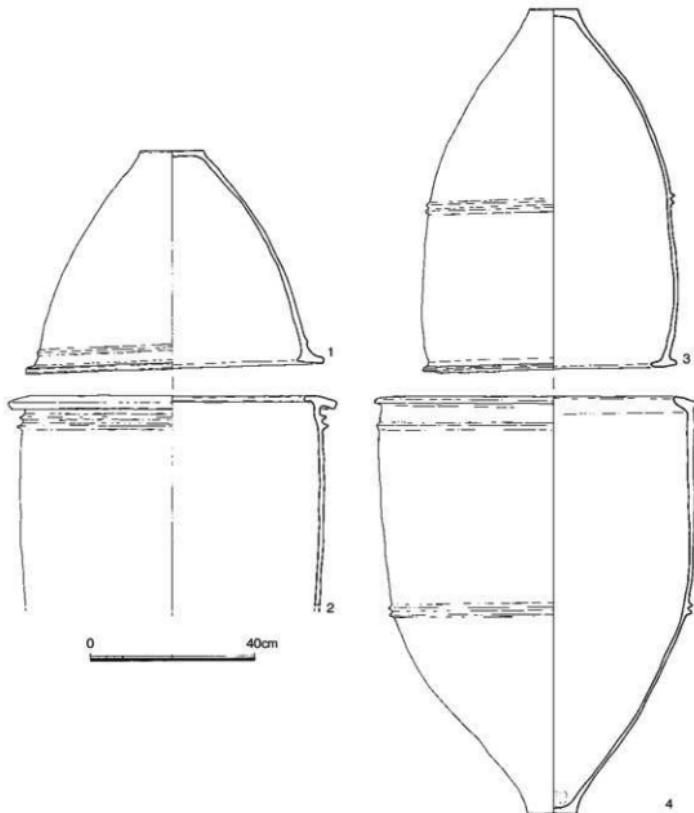


Fig.16 ST18・19壺棺実測図 (1/12)

に黒色を呈する部分があり、外面に黒色顔料が塗布された可能性がある。

ST18 (Fig.13・PL.5-2)

調査区北端部にて検出した。下棺の大部分が調査区外となる。既存建物の基礎と干渉し、下棺下部の救出は断念せざるを得なかった。壺棺は複棺である。上棺は鉢を用い、合口式に、下棺底部が北方に向くなるよう埋置する。壺棺の合口部に被覆粘土を検出した。粘土は壺棺の口縁部のみ覆うように最小限の範囲に被覆される。

壺棺について (Fig.16・PL.7)

上棺は圓面番号1。約80%残存する。器壁は赤褐色を呈する。下棺は番号2。大型の個体で口径67.2cmに復元される。

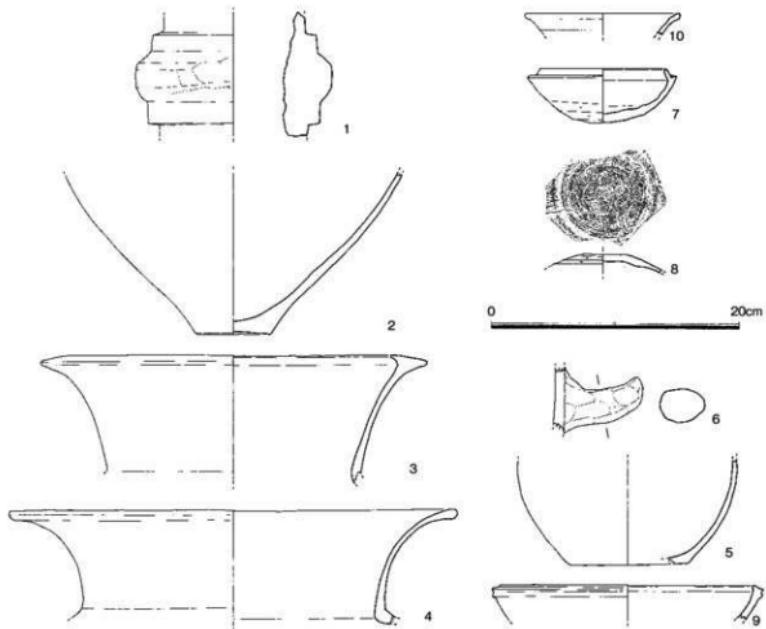


Fig.17 遺構検出面出土および表面採集遺物実測図 (1/4)

ST19 (Fig.15・PL.5-3)

調査区北東端部にて検出した。SK09・ST16に切られる。墓壙は不整な隅丸方形で北壁下部は大きくオーバーハングし、下棺が挿入されている。甕棺は複棺。甕を呑口式に、掘り方の傾斜に合わせ下棺底部を北方向に埋置する。上棺は墓壙底面から浮くので、墓壙南側の馬蹄形のテラス上面のレベルまで一旦埋めて上棺を安定させたものと推測される。

甕棺について (Fig.16・PL.8)

何れもほぼ完形に復元できた。上棺は圓面番号3。胎土は精良で口縁下部に突帯はない。下棺は4に示す。器壁の色調は明るい褐灰色を呈し、胴部外面に大きな黒斑がみられる。

③遺構検出面および表面採集で得られた遺物 (Fig.17)

1は石製品の小片である。暗灰色で砂粒を含む疊岩質の石材を用い、断面楕円形のパートを作り出す。石塔の部材の可能性が高く、近世以降の所産と思える。現状ではよくわからない。2～6は弥生土器である。1は甕の底部、3・4は広口甕の口縁部である。5は丹塗りの無頸甕で、胴部の小片である。6は土師器である。瓶の把手で牛角形を呈する。7～9は須恵器である。7は壺である。3/4個体残存する破片。8は暫定的に蓋とした。小片で外面にヘラ記号を有する。9は鉢口縁部の小片である。焼成はやや不良で軟質である。10は龍泉窯系青磁碗の小片である。口縁内面に目痕が残る。

3.まとめ

今回の調査で検出した壺棺墓の掘り方は成人棺で深さ1mほども残存し、削平の少なさが際立っていた。以下、これらの遺構について、周辺の調査事例を参考に現場で得た所見をまとめてみたい。

今回の調査で検出した壺棺は、大型棺5基・小型棺4基である。うちST10は古墳時代に下るため、弥生時代の壺棺の範疇には入らないので後に触れる。大型棺は須玖式と認められるST18を除き、何れも汲田式と須玖式の要素を含むもので、橋口達也氏編年によるKⅡcおよびKⅢa型式に含まれる。小児棺に用いられた壺と併せ、概ね弥生中期中葉頃の壺棺墓群である。

那珂遺跡群が乗る台地は大略南北方向に延びており、今回調査した壺棺墓群は北側で実施した80次調査の成果と併せ、台地尾根上を南北方向に列状に延びるものと推測される。壺棺には主軸が列の方向に直交する東西方向を向くものと平行する南北方向を向くものがあるが、掘り方の切り合は南北方向を向くST19を東西方向を向くST11・16・17が切っている状況であった。南北方向を向くST08との切りあいは不明だが、まず南北方向壺棺墓が先行して構築され、その後東西方向壺棺墓がそれらの間際に構築されている。ただし壺棺の型式に大きな差は認められない。東西方向大型棺ST16は掘り方底面で壺棺本体を支える構造になっていないなど、南北方向壺棺によって掘り方の構築にも規制を受けているものと推測される。

壺棺本体については、小型棺を含め黒色顔料塗布痕跡が認められる個体が少なくない。口縁部を打ち欠いて用いている壺棺も多いが、ST08は埋土から破片が出土し完形に復元できた。打ち割った口縁部にも黒色顔料の塗布が認められ、黒く塗った完形の壺棺を埋葬地までもってきてそこで口縁部を打ち割り、壺棺同士を調整していること、小型棺は別として埋め戻す際は打ち割った破片と一緒に埋めていることがわかる。同様に被覆粘土も事前に用意していたものと推測される。この粘土は台地周縁の低地で泥炭状の黒色土の下層に見られ、当時でも比較的容易に採取できたものと推測される。

これら壺棺墓群に付随すると考えられる遺構として周辺の土壙が挙げられる。とりわけSK02・20は遺物の内容から祭祀土壙と考えられる。SK20は複数回の掘り直しが認められ、底面も凹凸が著しいことから同じ箇所に何回も土壙を掘っていることがわかる。出土遺物も丹塗りの精製品が目立ち、祭祀で使用した土器を投げ込んだのであろう。ただし土層からは人為的に埋めた状況は認められず、自然に埋没し浅いくぼみ状となっていたと推測される。ここに構築されたのが壺棺の項で報告したST10である。これは古墳時代まで時期が下るもので時間的に懸隔している。しかしSK20の真上に構築されており、ST10構築当初はSK20が浅いくぼみとして残っていた可能性がある。

土壙SK09は内部に須恵器大甕を据え、打ち割ってから埋めた可能性がある。甕の内部からは瓦が1点出土した。混入の可能性はあるが大甕の破片の下にあったものである。今回の調査では他に瓦は出土していない。その瓦は凹面に模骨痕とそれを切る当て具痕を有する。凹面に当て具痕を有する瓦の類例は牛頭窯跡群大浦2号窯・野添13号窯・小田浦79-2号窯等に求められ、何れの出土須恵器も概ねIV-V期の範疇に収まる状況である。しかし甕の頭部には波状文・斜線文や文様帯が認められず、VI期以降にみられる新しい要素をもつ。甕と瓦には時期差があるとみられ、瓦のほうが甕より古い。SK09出土の瓦は摩滅が顕著で、これが用いられた建物が廃絶したのちある程度の時間が経過してから須恵器大甕のなかに落ち込んだ、もしくは意図的に入れられたものと推測される。

〈註〉

壺棺の編年は「壺棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告』XXXI 福岡県教育委員会 1979を、須恵器の編年は「牛頭窯跡群」一括報告書I— 大野城市教育委員会 2008 を参照した。



1 調査区全景（南より）



2 調査区東壁土層（西より）



3 SK02（北より）

PL.2



1 SK03 (北より)



2 SK09 (西より)



3 SK20 (東より)



1 SK20土層断面（南より）



2 ST05（東より）



3 ST06（南より）



1 ST08 (南より)



2 ST10 (南より)



3 ST11 (北より)



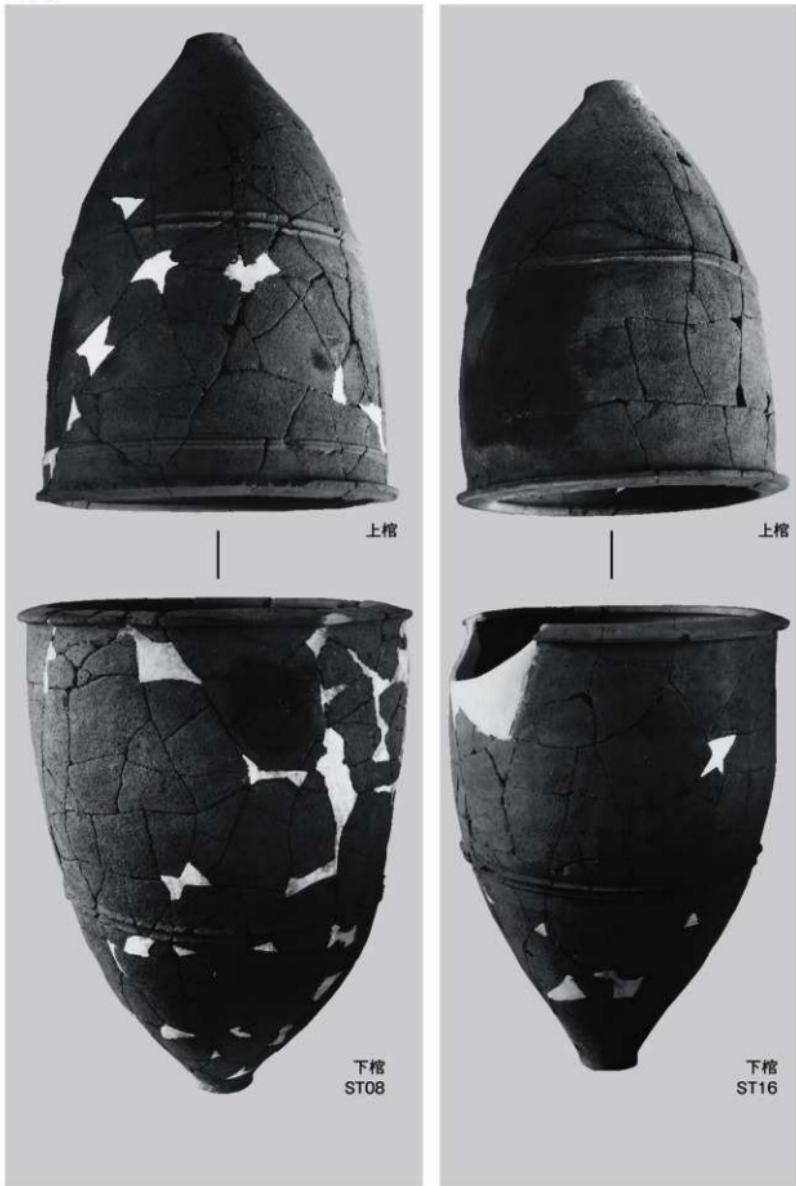
1 ST16 (東より)



2 ST18 (南より)



3 ST19 (南より)







上棺



ST05



下棺
ST19



ST17



Fig.9-16



Fig.17-1



Fig.9-14



Fig.9-17

Fig.9-13



Fig.9-18



那珂遺跡群第137次調査の記録

調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区那珂一丁目688番1（敷地面積543.87m²）における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成24年3月から5月にかけて受理した（事前審査番号：23-2-1120・24-2-1・24-2-98・24-2-99）。

これを受けた経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていること、平成24年5月に確認調査を実施し現地表面直下で遺構が確認されたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を重ねた。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できない切り土造成分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、事前審査番号24-2-98について平成24年7月21日付で株式会社シノケンハーモニーを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年7月29日から発掘調査を、翌平成25年度に資料整理・報告書作成を実施した。

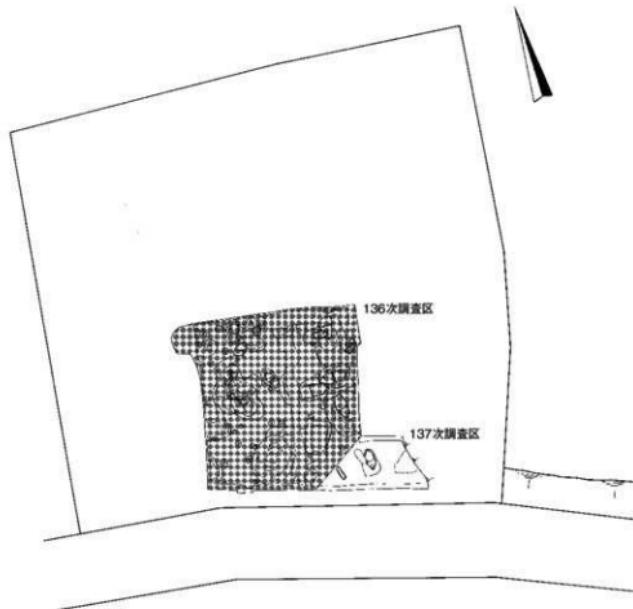


Fig.1 137次調査区位置図 (1/500)

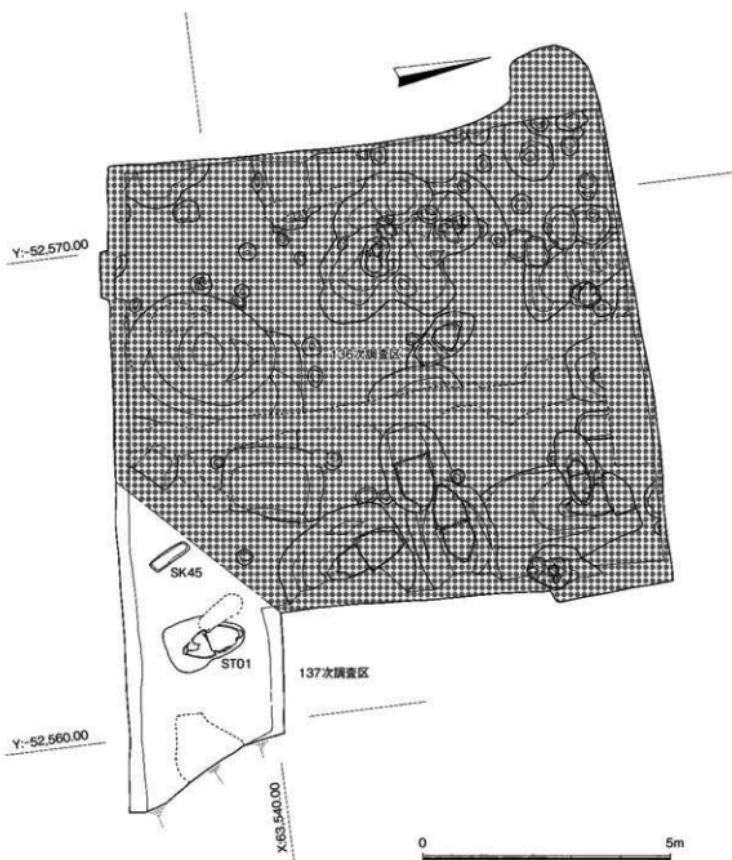


Fig.2 137次調査区全体図 (1/100)

調査の組織

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：文化財部埋蔵文化財調査課長

宮井善朗

調査第1係長

常松幹雄

調査庶務：埋蔵文化財審査課管理係

川村啓子

事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係長

加藤良彦

事前審査係主任文化財主事

佐藤一郎

事前審査係文化財主事

木下博文（平成23年度）

森本幹彦（平成24・25年度）

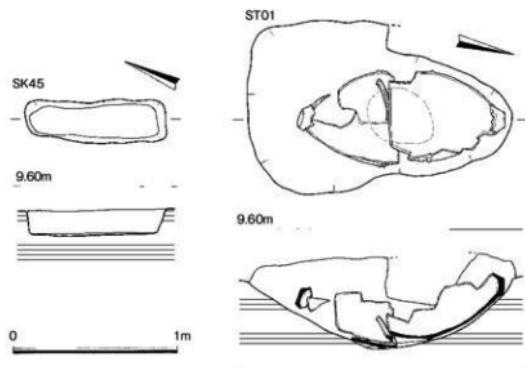


Fig.3 SK45・ST01実測図 (1/30)

調査担当：埋蔵文化財調査課調査第1係文化財主事

阿部泰之

なお文化財部は、組織改編のため平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

2. 遺構と遺物

① 土壙 (SK)

SK45 (Fig.3・PL.1-3)

調査区南部にて検出した。後に報告するST01と隣り合う土壙である。平面形は長軸を南北方向に持つ隅丸長方形で、北辺は丸くなる。長径0.84m・短径0.28m、深さ0.2mを測り断面形はほぼ長方形となる。各壁面は切り立ち、底面はフラットである。埋土は黒褐色土、ロームの粒子を含むものの均一な堆積であった。

出土遺物 (Fig.4・PL.2)

すべてガラス小玉である。玉の直径・厚さとも3~4mm、重量は最大で0.06gを測る。色調は浅緑色の個体とコバルト色の個体があり透明感や濃淡の差はあるが、形態に有意の差は認められない。厚みのあるものは円筒形を呈し、個体概観上の観察からは熱した管状のガラス棒を熱いうちに切断して整形し玉の形を作り出したものと推測される。

ほかに土器等遺物は出土しなかった。遺構埋土掘り下げ時にその存在に気づき、以後埋土をすべて取り上げて水洗しこれらの玉を見出したものである。よって玉の平面・立体的分布は現場では明らかにしえなかった。図示したものは完形のものであり、22点を数える。図示していない破片を含めると25点以上のガラス小玉があった可能性が高い。

② 壽棺墓 (ST)

ST01 (Fig.3・PL.1-2)

調査区北縁辺部にて検出した小型棺である。墓壙は搅乱に切られて不確実だが、残存部分から隅丸長方形と推測される。断面形は皿状で底面はフラット、寿棺の曲面にあわせており寿棺は墓壙に直接乗っている。寿棺は複棺で何れも寿を用いる。上棺は口縁部を、下棺は胴部半ばから上を打ち欠いて

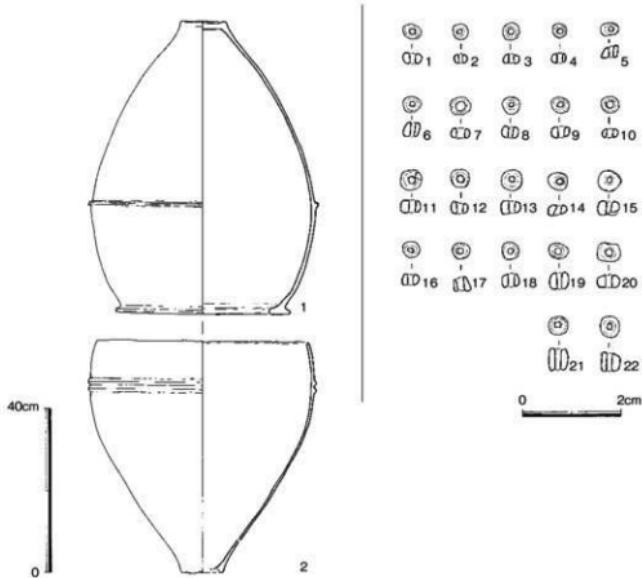


Fig.4 SK45・ST01出土遺物実測図 (1/1・1/12)

用い、呑口式に下棺底部を南方向に埋置する。打ち欠いた破片は壺本体安定のため支えとして用いられている。被覆粘土は検出できなかった。

壺棺について (Fig.4・PL.2)

上棺は図面番号1に示す。前述のとおり口縁部を打ち欠いて用いられていたが破片が接合でき、口縁部まで復元できた。3/4個体残存する。外面に黒色を呈する部分があり黒色顔料を塗布した可能性がある。下棺は番号2。口縁部直下から打ちかかれているが、こちらの口縁部は出土しなかった。3/4個体残存し、外面に黒色顔料を塗布した痕跡が認められる。

3. 小結

今回の調査では、136次調査区からつづく壺棺墓群の一部を検出した。遺構数は少ないが、各遺構についての所見を述べて小結としたい。

壺棺墓ST01は小型棺の範疇に入るものである。壺棺は上下とも口縁部を打ち欠いて使用されるが、上棺のみ口縁部が埋土中から出土した。下棺は口縁部下から上を欠いて使用されるが掘り方から破片は出土せず、136次調査の大型棺と異なり破片を掘り方に入れなかった、もしくは埋葬地に持っていく前に打ち欠いた可能性がある。

SK45は小規模な土壙だが、ガラス小玉のみ25点以上出土した那珂遺跡群では稀少な遺構である。玉類を所有しうる人物に関する遺構である。小規模な土壙であるが、主軸線は壺棺墓と同じ方向を指向しており、整った形態から土壙墓ないしそれに類する遺構とみられる。



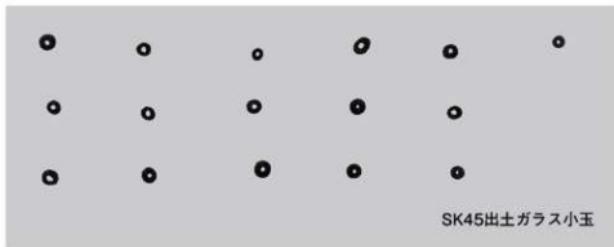
1 調査区全景（南より）



2 ST01（東より）



3 SK45（東より）



那珂遺跡群第138次調査

I 調査区の設定

調査範囲は共同住宅の基礎部分が遺構面に達する南側の19mに限られた。

SD01

調査区西際で北東方向に直線的に延長するラインを検出した。溝の可能性があることからSD01とネーミングしたが下層からSX02、SX03の落ち込みと井戸と考えられるSE04が検出された。

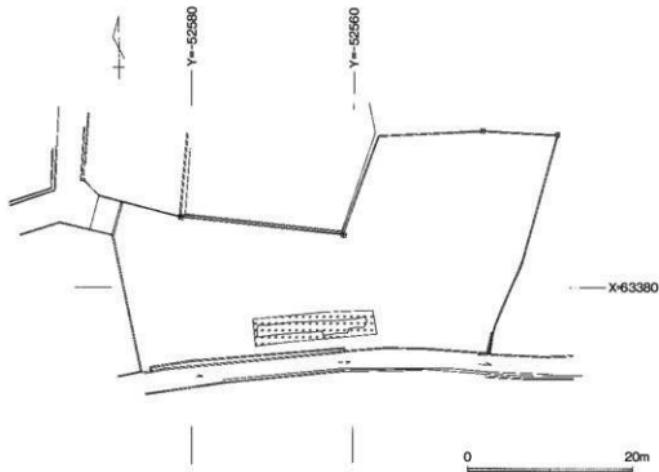


Fig.1 調査区位置図 (1/600)

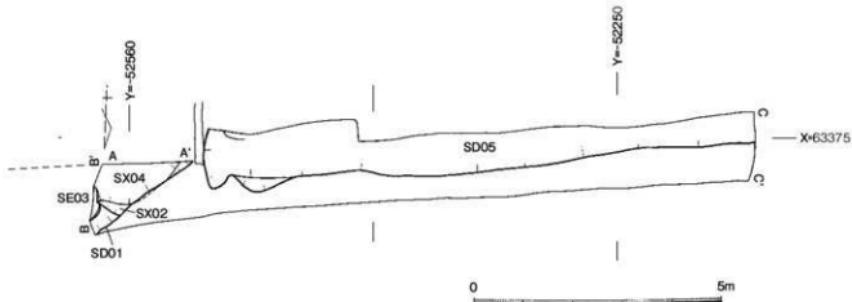


Fig.2 遺構配置図 (1/100)

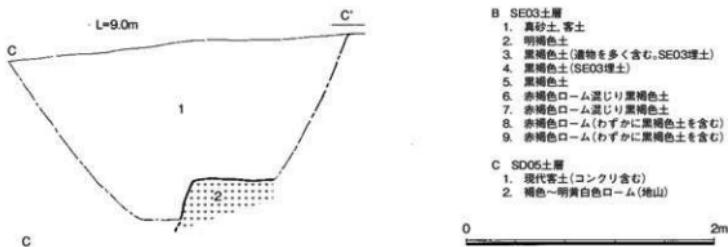
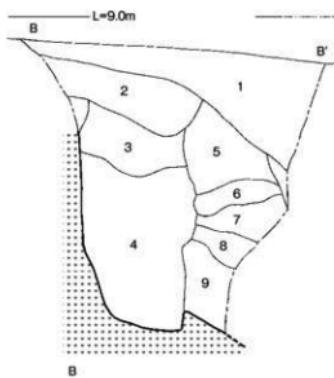
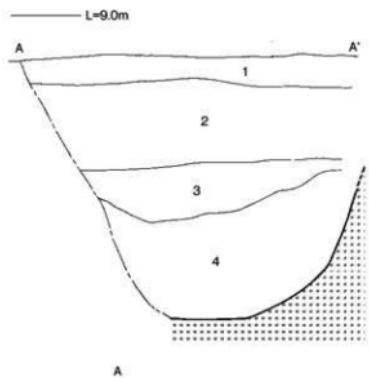
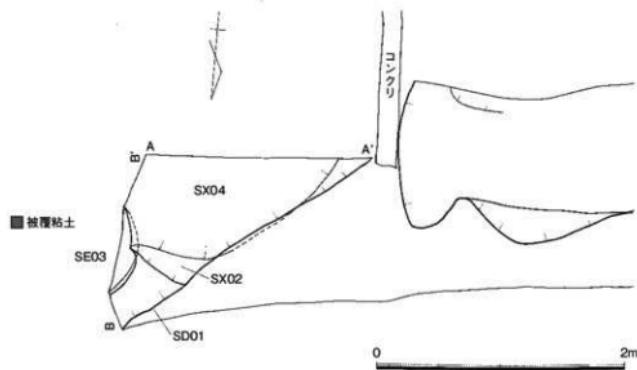


Fig.3 遺構実測図 (1/40, 1/50)

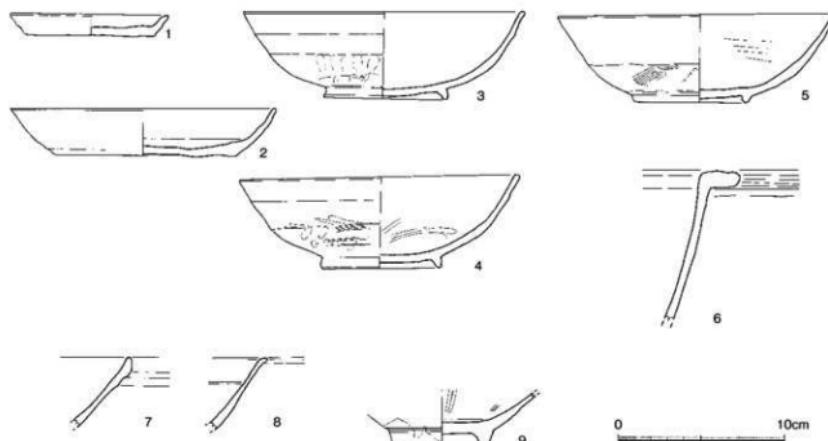


Fig.4 SD01出土遺物実測図 (1/3)

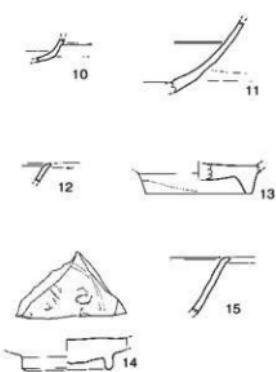


Fig.5 SE03, SX04出土遺物実測図 (1/3)

Fig.3のA-A'の3に該当した上層明褐色土部分である。
出土遺物

1は完形に近い口径9.6cm、器高1.4cmの土師皿である。外底に板目の圧痕を残す。2は口径16.0cm、器高3.0cmの土師器坏である。外底に板目の圧痕が残る。3～5はほぼ同規格の瓦器椀である。完形に近い1は口径17.5cm、器高5.6cmを測る。体部中位が弱く屈曲し、その下部にカキメ状のハケメを部分的に残す。また、4は高台近くに同間隔で指頭痕がみられる。6は土師器の鍋型である。内外面に丁寧なナデが施され、外面に煤が付着する。7は玉縁のIV類（大宰府分類）白磁椀である。8は灰色に発色した白磁椀V類である。9は高台以下露胎であるが、火熱で釉が融解している。

下限の時期は13世紀前半以降と考えられる。

SX02

SD01の下部で検出された落ち込みであるが、性格は不明である。

出土遺物

10は白磁の皿もしくは合子と思われる。白色を呈し、体部中位に段を有した屈曲をもつ。11は白磁椀である。

SE03

SX02の下部で検出された井戸の可能性がある落ち込みである。井筒と思われる径110cmの円形の黒褐色土の埋土が検出された。表土から深さ280cmまで検出した。

出土遺物

12、13は白磁椀である。12は灰色に発色している。

SX04

SE03同様に井戸の可能性がある円形の落ち込みがSX02下部から検出された。規模は不明である。埋土は明褐色土ないし、赤褐色ローム混じり黒褐色土で、表土から270cmまで検出した。

出土遺物

14はオリーブ色の龍泉窯系青磁椀である。15は灰白色の白磁椀である。

出土瓦

検出した中世の遺構から前代の6世紀後半から7世紀代にかけての瓦が出土した。ここで一括して説明する。なお、観察表をFig.13に示す。

丸瓦

16～18は泥状盤技法で成形された丸瓦である。16の凸面に横方向のハケメを一部残すが、ナデを全体に施す。灰黄色を呈し、軟質の須恵器の焼成である。厚みは1.2cm程度で薄い。19～22は凹面に竹状模骨痕が残る丸瓦である。20,22は凸面にタタキ痕を残す。橙色の軟質の焼成である。厚みが1.5cm以上となる。21の凸面の段状となった一部に布目が残る。

平瓦

23、24は灰黄色を呈した軟質の須恵器の焼成である。丸瓦16、18と近似した薄く凹面に模骨痕が無い「神の前窓」系の平瓦である。25、26、27、29の遺存部分には模骨痕がみられない。25は凹面に同心円文の当其痕を残した初期瓦である。29の側縁は凹凸両面に面取がみられる。28は凹面に竹状模骨痕を残し、丸瓦同様に橙色を呈した軟質の焼成である。

30～32は凹面に模骨痕がみられ、布目痕を明瞭に残す平瓦である。灰褐色を呈し、調整、焼成が近似する。30、31は端部にかけて、土器口縁状に窄まる。また、窄まっていく端部にかけて凹凸両面にヨコナデが施されている。32の凸面には分割線と思われる線刻がみられる。

33～38は凹凸両面にナデ調整が加えられ、タタキ痕、模骨痕、布目痕がほとんど残らない。焼成は38が硬質である以外は極めて軟質である。厚みは1.5cm前後である。39～41は凸面に平行タタキが施されている。41は凝格子タタキで厚く堅緻な焼成である。布目痕はみられない。42、43は凸面に格子タタキ痕を残し、41と同じく模骨痕がみられず、厚く堅緻な焼成である。44は凸面に斜格子タタキ痕を残すが凹面にナデ消されず模骨痕と布目痕が少し残る。

軒丸瓦・鶴尾

45は、百濟系单弁瓦片である。46は、鶴尾の可能性がある。段を有し、細い曲線が連続する。破面に刻みが連続し、接合面ともみられる。暗灰～黒灰色を呈し軟質である。

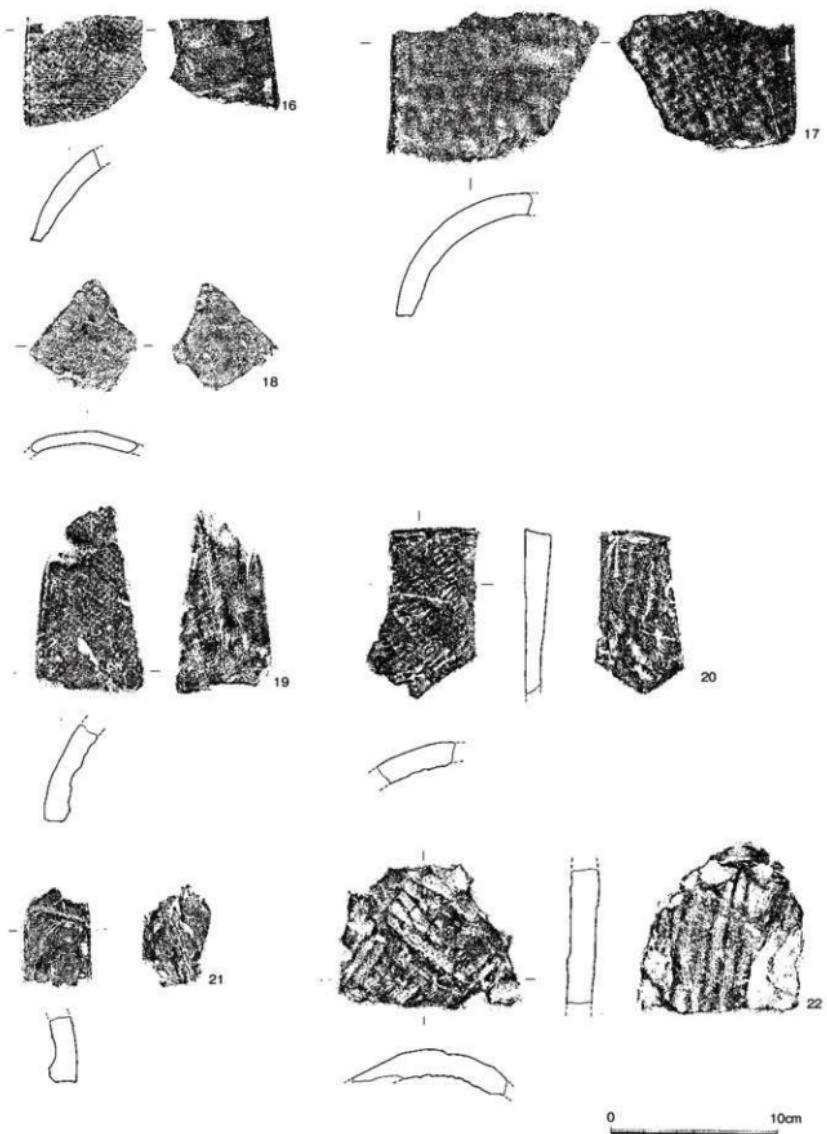


Fig.6 瓦実測図1 (丸瓦 1/3)

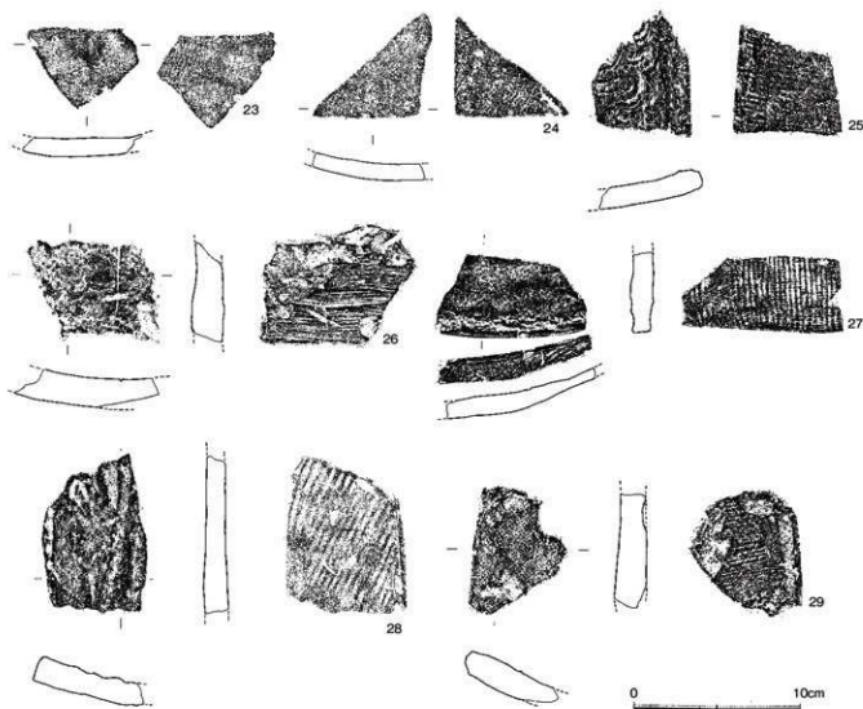
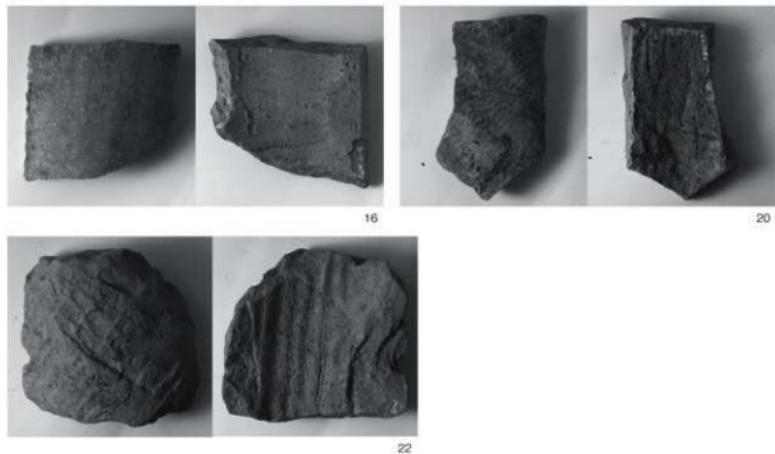


Fig.7 瓦实测图2 (平瓦 1/3)



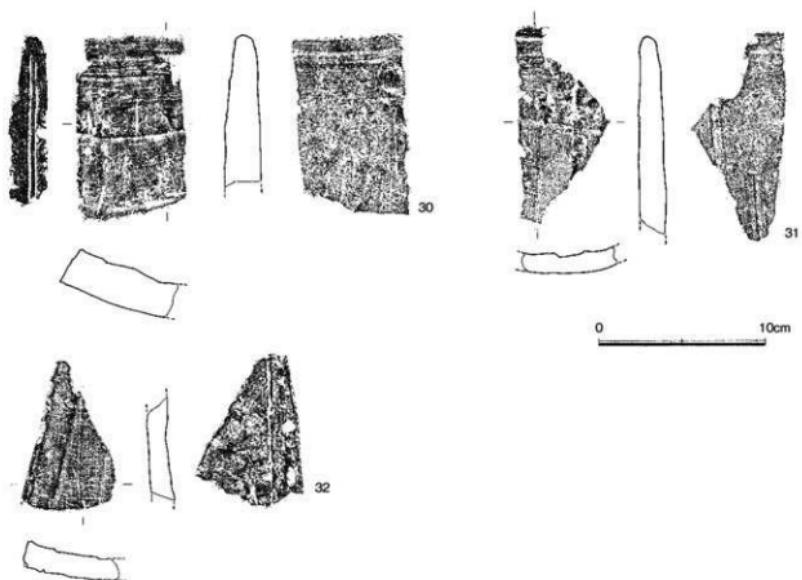
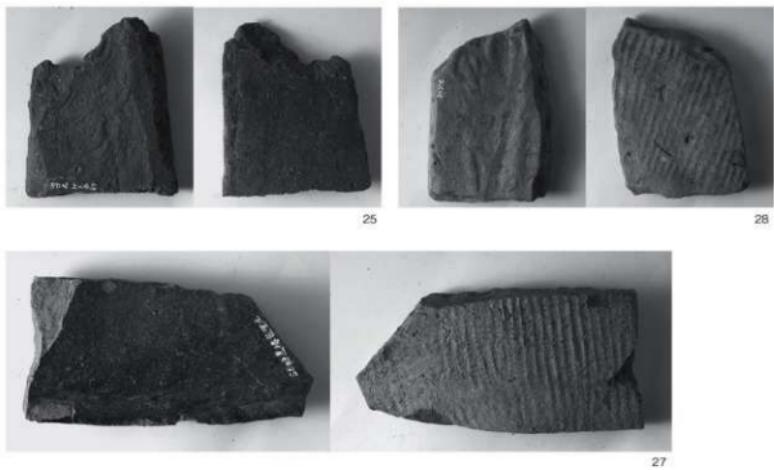


Fig.8 瓦実測図3 (平瓦 1/3)



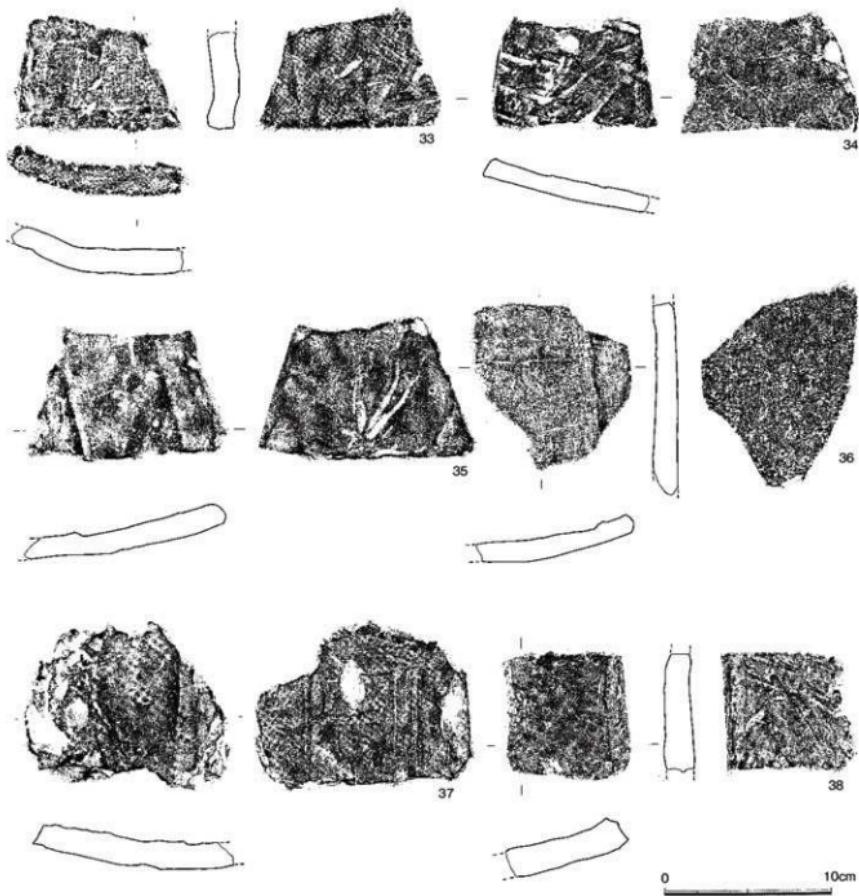
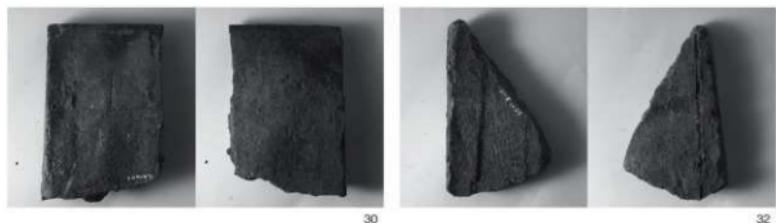


Fig.9 瓦実測図4 (平瓦 1/3)



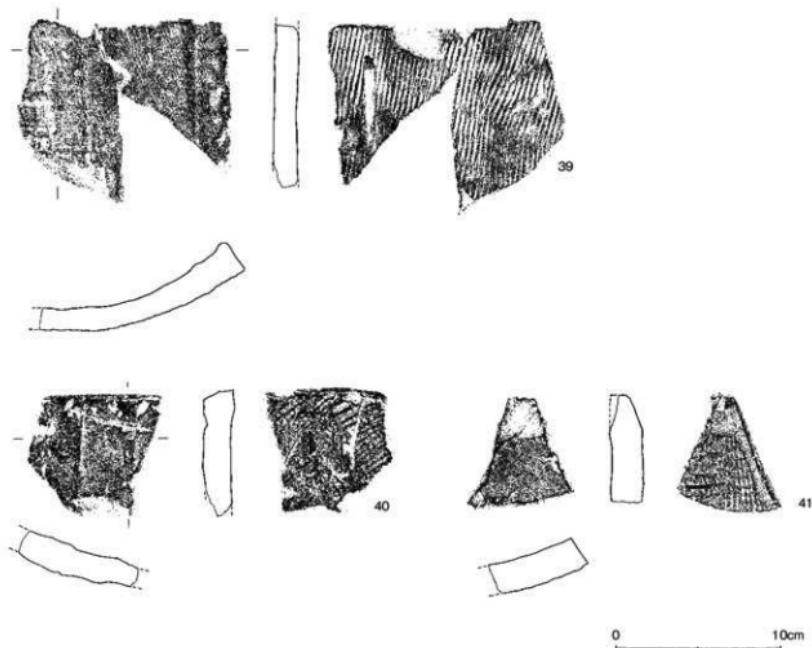
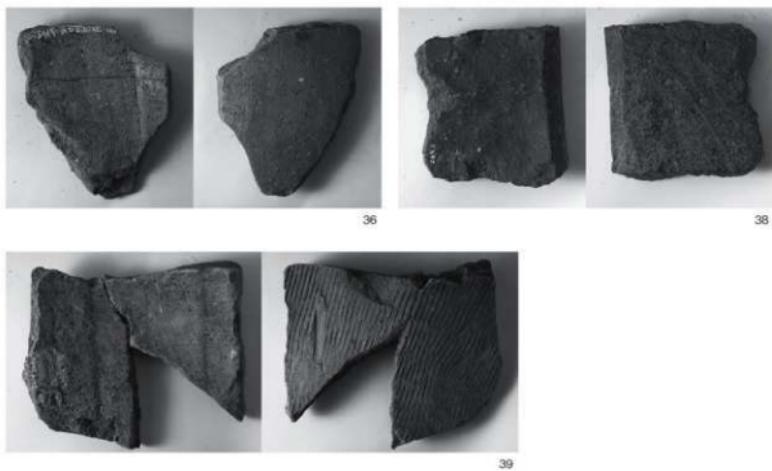


Fig.10 瓦実測図5 (平瓦 1/3)



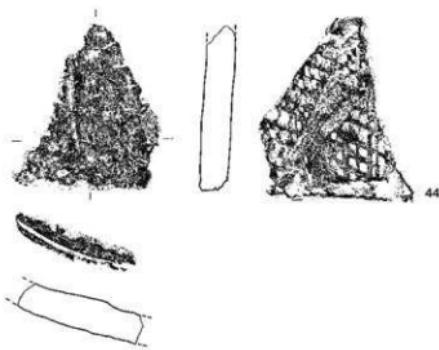
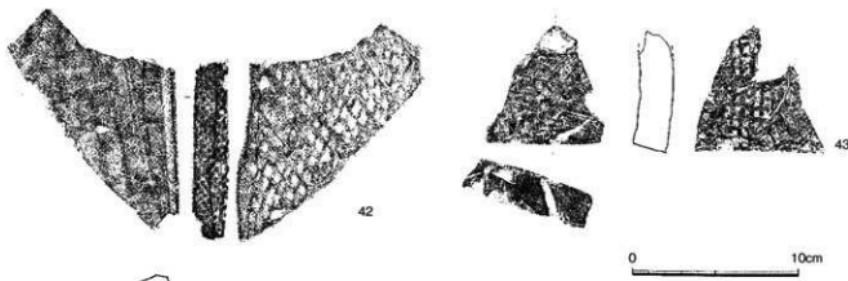
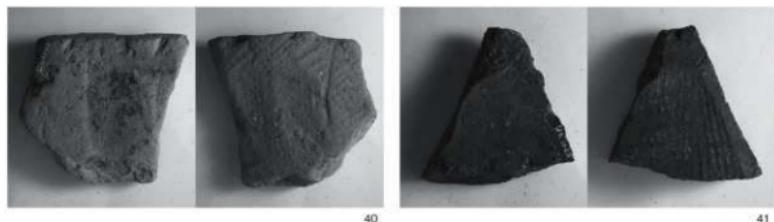


Fig.11 瓦実測図6 (平瓦 1/3)



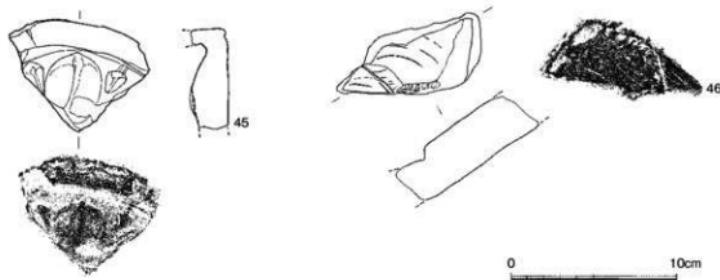


Fig.12 瓦実測図7 (軒丸瓦 鳥尾 1/3)

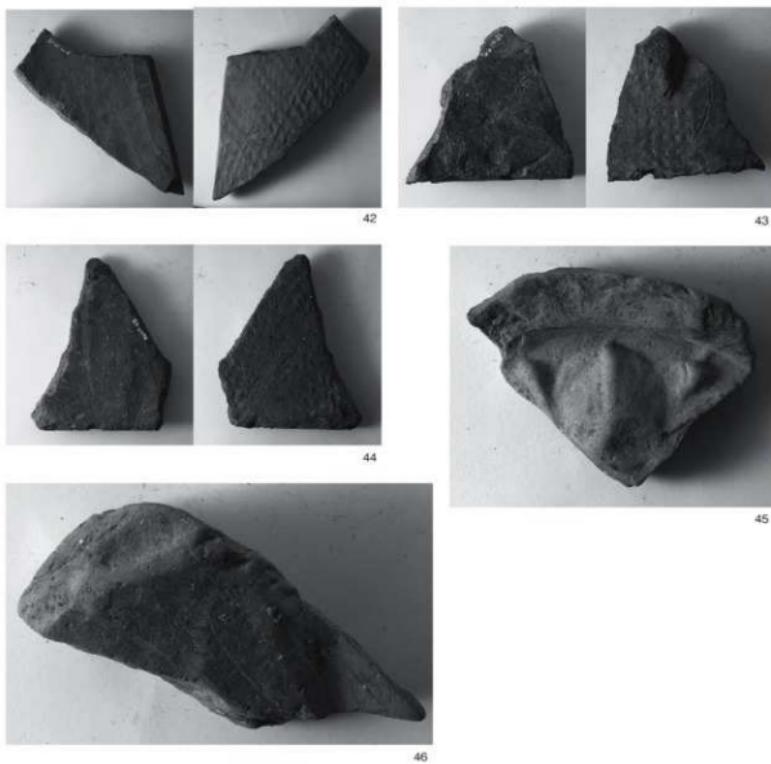


Fig.13 出土瓦観察表

No.	遺構名	種類	厚さ	色調	焼成	特徴
16	SD01	丸瓦	12	灰黄	硬	泥状盤築技法。凸面ハケメ、ナデ、凹面ヨコナデ。側縁を面取り。
17	SD01	丸瓦	13	灰黄	硬	泥状盤築技法。凸面ナデ。凹面側縁一部面取り。ナデ。
18	SX02	丸瓦	0.7	灰黄	硬	泥状盤築技法。凸面ナデ。凹面ナデ。
19	SX02	丸瓦	1.7	黄橙	軟	火熱を受け溶融。凸面不明。凹面竹状模骨痕。布目。
20	SD01	丸瓦	1.7	黄橙	軟	凸面平行タタキ。凹面ナデ。布目、模骨不明瞭。
21	SD01	丸瓦	1.5	灰黄褐	軟	凸面ナデ。小さい段に布目痕。凹面竹状模骨痕。
22	SD01	丸瓦	1.5	橙	軟	凸面格子タタキ。凹面竹状模骨痕、布目痕。
23	SD01	平瓦	1.1	灰黄	硬	凸面ハケメ、ナデ。凹面ナデ。
24	SD01	平瓦	1.1	灰白	軟	凸面凝格子タタキ。凹面不明。
25	SD01	平瓦	1.3	灰	堅緻	凸面凝格子タタキ、ナデ。凹面側縁面取。同心円文当具痕。
26	SD01	平瓦	1.7	灰白	軟	凸面ハケメ、凹面ナデ。線刻（分割線？）を有す。
27	SE03	平瓦	1.4	灰・暗灰	堅緻	端部にかけて薄い。凸面凝格子タタキ。凹面ナデ。
28	SX02	平瓦	1.5	橙	軟	凸面平行タタキ。凹面竹状模骨痕。
29	SD01	平瓦	1.5	灰黄	軟	凸面平行タタキ。凹面ナデ。側縁凸凹面に面取。
30	SD01	平瓦	2.3	灰褐	硬	端部にかけて窄まる。凸面ナデ。凹面ナデ。布目痕、模骨痕。
31	SE04	平瓦	2.1	灰褐	硬	端部にかけて窄まる。凸面ナデ。凹面ナデ、布目痕、模骨痕。
32	SD01	平瓦	1.5	灰褐	硬	凸面ナデ、指頭痕、線刻（分割線？）を有す。凹面布目痕、模骨痕。
33	SD01	平瓦	1.5	灰白	軟	凸面ナデ。凹面布目痕、模骨痕不明瞭。
34	SX02	平瓦	1.0	灰褐	軟	凸面不明。凹面ナデ、布目痕。模骨痕不明瞭。
35	SX02	平瓦	1.4	橙	軟	側縁を2面取。凸面不明。凹面模骨痕。布目不明。
36	SD01	平瓦	1.2	橙	軟	側縁を2面取。凸面不明。凹面模骨痕幅約2.7cm、布目痕。圓線（紐？）有。
37	SD01	平瓦	1.6	灰黄	軟	凸面板ナデ、凹面模骨幅18cm。ナデ調整。布目痕がわずかに残る。
38	SX02	平瓦	1.7	灰	堅緻	凸面平行タタキ後ナデ。凹面側縁面取り。ナデ。布目痕がわずかに残る。
39	SD01	平瓦	1.2	灰黄	硬	凸面平行タタキ。凹面模骨幅18cm、ナデ。布目痕一部残る。
40	SD01	平瓦	1.6	黄橙	軟	凸面平行タタキ。凹面模骨幅26cm。ナデ。布目痕一部残る。
41	SD01	平瓦	2.0	灰	堅緻	凸面端辺面取。側縁面取。凝格子タタキ。凹面ナデ。
42	SD01	平瓦	1.7	灰	堅緻	凸面斜格子タタキ。凹面側縁面取り。ナデ。
43	SD01	平瓦	2.2	灰褐	堅緻	凸面格子タタキ。凹面ナデ。板ナデ。
44	SD01	平瓦	1.7	紫灰	硬	凸面斜格子タタキ。凹面模骨幅25cm。ナデ。わずかに布目痕が残る。
45	SD01	軒丸瓦		灰白	軟	百済系單弁。厚み1.5～1.9cm。
46	SD01	鶴尾		暗灰	軟	厚み2.3～3.2cm。細い曲線を刻む。

※焼成は軟—硬—堅緻の順で硬度を示す

まとめ

遺構の時期と性格

調査区が極めて小範囲であることから遺構の形状、規模等不明確な点が多い。SE03、SX04は13世紀前半までの時期と思われる。

現況の水路と平行したSD05の掘削時期がどこまで遡るのかは不明であるが、周辺の調査では中世後半期の溝が現況の道路や水路に平行しているものが確認され、区画や水路として機能が継承され、近世村落が形成されたものと考えられる。本報告書に所収された那珂遺跡群第140次調査で検出された溝も同様に現況道路に平行している。

出土瓦について

6世紀後半以降の初期瓦が周辺の調査でも出土している。その検討から概ね1、神の前窯の泥状整築技法による瓦、2、竹状模骨痕を有した瓦や線刻等の軒丸瓦、3、百済系單弁瓦の3時期に分類される。また、その分布は東へ拡大し、出土量も順次増加していることが確認されている（比嘉えりか『福岡市那珂遺跡群出土瓦の検討』『福岡大学考古学論集2』2013）。

今回の調査ではこの3時期の瓦がすべて出土し、周辺を含めたこの区域から次第に拡大したことが考えられる。しかし、瓦を伴う遺構は検出されていない。

初期瓦の特徴として泥状整築技法の瓦は軟質の灰白色を呈し、器厚が薄い。2期のものは橙色を呈した土師質に近いものが多い。この時期に伴う軒瓦は本調査では出土していないが、線刻等による稚拙なものが既往の調査で出土している。3期では格子タタキ痕が残り、模骨痕がなく須恵質の堅緻なものが多い。器胎は厚い。軒瓦の製作を含め技法や焼成において2期と3期の間に大きな画期が見受けられる。3期において瓦の生産体制や、技術が変革したものと思われる。



Fig.14 第138次調査地点と中世後半期の溝 (昭和初期地形図 1/3,000 「那珂58」(市報1121集に加筆))



1. 調査区全景（南西から）



2. 調査区全景（南東から）



3. SX01, 02（南から）



4. SE03, SX04（北東から）



5. SE03, SX04（北西から）



6. SD05断面（東から）

那珂遺跡群第140次調査

1. 調査区の設定

敷地内にはその南側の現況道路に平行した比高差40cm以上の段落ちが略東西方向に延びていた。試掘調査と照合し、設計変更によって工事範囲のほとんど部分が遺構面に影響を与えなくなったが、この段落ち部分に限り、成形工事によって遺構面が破壊されることから調査区が設定された。

2. 調査の記録

遺構面の削平が著しく、検出された遺構は西側に設定した調査区で検出されたSD01のみである。

SD01

略東西方に延長約4mを検出したが、南側の立ち上がりは調査区外となり幅や基底面については不明である。断面の形状はロート状を呈し底面から60cmまでは直に近い立ち上がりである。調査区内の最深部の深さは検出面から90cmを測る。埋土は中央部に現代客土が堆積し、その他は灰色土を基調とした土色である。最下底には流水による砂質土が堆積し、その上層はロームの赤色土と灰色土の互層に近い。

出土遺物

中世の黒色土器や古墳時代以降の須恵器(Ph.6)を含むが、そのほとんどは近世の陶磁器類(Ph.5)である。

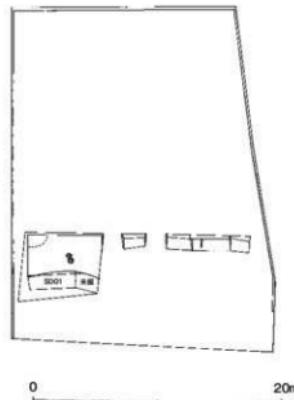


Fig.1 調査区位置図 (1/400)

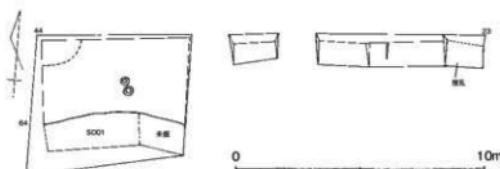


Fig.2 遺構配置図 (1/200)

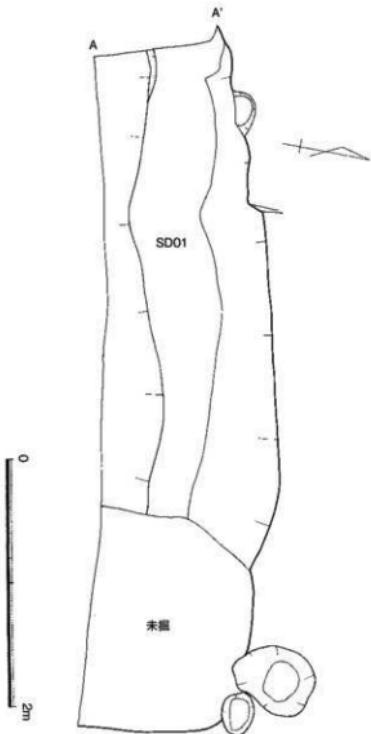


Ph.1 SD01完掘状況(東から)



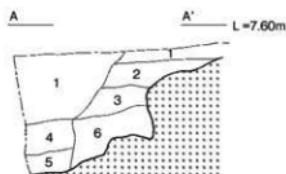
Ph.2 東側調査区全景 (段落ち部分 東から)

まとめ（SD01について）



検出されたSD01の掘削時期は近世までは遡り、現況の道路が平行していることからその区画が継承されたものと考えられる。SD01全体が調査されていないので、形状や掘削時期がどこまで遡るか不明であるが、東側の近接した94次調査（Fig.4, 5）で検出されたSD01は延長していく可能性が高い。第94次調査のSD01はロート状の形状を呈し下部は直に近い壁面をなす。また、下層に中世、上層に近世の遺物を含むことから掘りなおされて継承されてきたと考えられる。このことから今回調査のSD01は上層部分のみを検出しているとみられる。

那珂遺跡群の既往の調査では中世後半期の溝が踏襲されて現代の道路や水路と平行しているものが見受けられる。本調査や第94次調査で検出されたSD01は流水を窺わせる埋土から機能的には水路としての利用もあったとみられるが、館等を囲む区画や水路も兼ね備えた複合的な機能についてはまだ明らかではない。



SD01土層	
1.	寄土
2.	灰色土
3.	灰色砂質土
4.	灰色砂質土(縞りが細い)
5.	灰色砂質土
6.	赤色土混じり灰色砂質土

Fig.3 SD01実測図 (1/40)



Ph.3 SD01完掘状況（東から）



Ph.4 SD01土層断面（東から）



Ph.5 SD01出土近世陶磁器類



Ph.6 SD01出土遺物（中世以前）

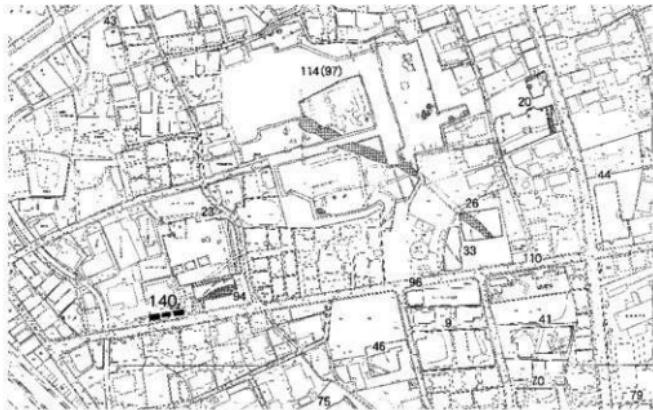


Fig.4 第140次調査地点と中世後期の溝（1/3,000 那珂58 市報1121集に加筆）

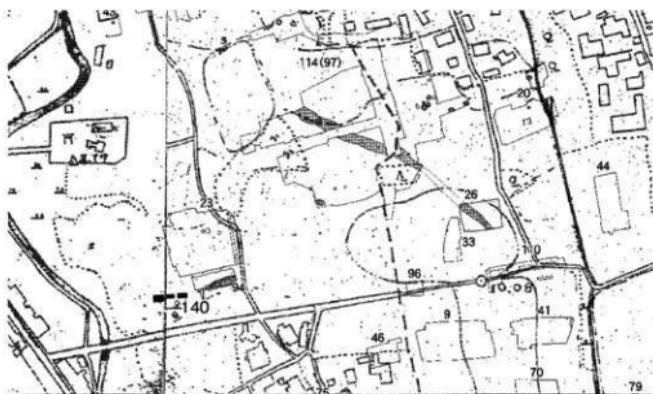


Fig.5 旧地形図（1/3,000 昭和初期 地図の歪みから調査地点が北側に寄りすぎている）

報告書抄録

ふりがな	なか						
書名	那珂 68						
副書名	那珂遺跡群第136・137・138・140次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1230集						
編著者名	阿部 泰之						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8622 福岡市中央区天神一丁目8番1号 TEL (092) 711-4667						
発行年月日	平成26年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積m ²	発掘原因
那珂遺跡群 第136次	福岡市博多区那珂 1丁目688番1-3-4	40130	0085	33°34'18"	130°26'3"	2012.7.6 ~ 2012.7.28	922m ² 記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
那珂遺跡群	墓地	弥生・飛鳥	土壙・甕棺墓	弥生土器・甕棺・須恵器	列埋葬		
要約	<p>今回の調査で検出された遺構は、甕棺墓9基・土壙3基・柱穴・ビット多数である。甕棺墓は成人5基・小児棺4基。土壙はうち2基がいわゆる祭祀土壙となり時期は中期中葉頃とみられる。その他一方の壁面を掘り込み横穴を付設するものがあるが、遺物が僅少で詳細な時期は不明。遺物は主に祭祀土壙から弥生土器がまとまって出土し、一部は完形のものが投げ込まれた状態で出土した。また、遺構検出面としたローム上には黒褐色土が堆積し、須恵器を多く含む。</p> <p>今回の調査では、多くの甕棺墓・古代の土壤など多くの遺構を検出した。調査区壁面の観察から、甕棺墓掘り方は前述の黒褐色土層に達せず、須恵器大甕を据えた土壙SK09はその上面から掘り込まれる。通常1m近くある鳥栖ロームは30~40cm程度で下部の砂質土層に達することから、調査地一帯は古代でも古い段階でロームを大きく削り込んだ上で盛り土作業を含む整地がなされ、大きな平坦面が造成された可能性が高い。</p>						

報告書抄録

ふりがな	なか							
書名	那珂 68							
副書名	那珂遺跡群第136・137・138・140次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1230集							
編著者名	阿部 泰之							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8622 福岡市中央区天神一丁目8番1号 Tel (092) 711-4667							
発行年月日	平成26年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積m ²	発掘原因
那珂遺跡群 第137次	福岡市博多区那珂 1丁目688番5	市町村	遺跡番号			2012・7・6～ 2012・7・28	142m ²	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
那珂遺跡群	墓地	弥生・飛鳥	土壙・甕棺墓	弥生土器・甕棺・須恵器			列埋葬	
要約 今回の調査地は那珂遺跡群の中央部、遺跡が乗る丘陵の最高所付近に位置する。標高約10mを測り、南に面する道路面から1m前後高くなる。遺構面は現地表面下-50～60cm、明褐色ローム上とした。検出された遺構は、甕棺墓1基・土壙1基である。甕棺墓は小型棺の範囲のものである。土壙は小規模であったがガラス小玉がまとまって出土し、特異な様相を示す。また、遺構検出面としたローム上には黒褐色土が堆積し、須恵器を多く含む。 今回の調査では、甕棺墓やガラス小玉を有する土壙など重要な遺構を検出した。調査区壁面の観察から、甕棺墓割り方は前述の黒褐色土層に達せず、136次調査検出の須恵器大甕を被えた土壙はその上面から掘り込まれる。通常1m近くある鳥柄ロームは30～40cm程度で下部の砂質土層に達することから、調査地一帯は古代でも古い段階でロームを大きく削り込んだ上で盛り土作業を含む整地がなされ、大きな平坦面が造成された可能性が高い。								

報告書抄録

ふりがな	なか						
書名	那珂 68						
副書名	那珂遺跡群第136・137・138・140次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1230集						
編著者名	荒牧 宏行						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8622 福岡市中央区天神一丁目8番1号 TEL (092) 711-4667						
発行年月日	平成26年3月24日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積m ²
		市町村	遺跡番号				発掘原因
那珂遺跡群 第138次	博多区竹下5丁目 18、37番地	40130	0088	33°34'12.6"	130°26'2.0"	20120717～ 20120801	19m ²
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
那珂遺跡群 第138次	集落	鎌倉	溝・井戸		瓦器梶・初期瓦	7世紀代の初期瓦出土	
要約	近世から現代まで継承された水路の肩と13世紀代の井戸2基が検出された。井戸からは7世紀代の初期瓦が出土した。						

報告書抄録

ふりがな	なか							
書名	那珂 68							
副書名	那珂遺跡群第136・137・138・140次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1230集							
編著者名	荒牧 宏行							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8622 福岡市中央区天神一丁目8番1号 Tel (092) 711-4667							
発行年月日	平成26年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
那珂遺跡群 第140次	福岡市博多区竹下5 丁目287番地	40130	0088	33°34'40"	130°26'34"	2012.11.19 ~ 2012.11.29	34m ²	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
那珂遺跡群 第140次	集落	近世	溝・柱穴	近世陶磁器				
要 約	<p>検出された遺構は大溝の肩部と柱穴3基のみである。現状でトスロームの下部まで削平されていたので消滅した遺構が多いものとみられる。</p> <p>溝の上部は近世にかけて埋没したものであるが、掘削時期は中世に遡る可能性がある。この溝は第94次調査から現況の道路に沿って本調査区まで延長しているものと考えられその区画が現在まで継承されている可能性がある。</p>							

那珂 68

—那珂遺跡群第 136・137・138・140 次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告 第 1230 集

平成 26 年 3 月 24 日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目 1 番 8 号

印刷 株式会社 西日本新聞印刷
福岡市博多区吉塚八丁目 2 番 15 号